

さ ぜ

舌音にして單子音の一つ。

さの濁音。

さ 左(名)

「一」ひだり。「二」舞樂に云ふ詞。左方の略。

さ 差(名)

「三」次文。●下文。○「左の通」左の如し
ちがひ。●差違。●差別。

さ 左(副)

し。●左様に。

さ (發)

意味なしに音調を添ふる詞。○「さ夜更く」
「さ進」さ衣

さ 坐(名)

「一」人の坐する場所。●席。●座席。「二」座
して居る人。「三」能樂にて同流儀の一組。

さ 妻(名)

○「觀世座」寶生座「四」芝居にて演者の一
團體。又は興行所。○「川上座」「新富座」
つま。

さ 犀(名)

獸の名。象に似て小さく鼻の上に角あり
熱帶地方に産するもの。角三本を有し。其
角は犀角ささて藥品に用ひらる。

さ 豺(名)

獸の名。おほかみ。

さ 采(名)

雙六にて數を振り出す具。一より六まで
を一面に一數づゝ記したる四角四面のもの

の。象牙などにて作る。

菜(名)

飯に添へて食ふもの。●おひす。

砦(名)

とりで。

歳(名)

「一」とし。「二」年齢……又才さも書く。

才(名)

●とし。「二」智識の活動。●はたらき。●才氣。

才(名)

「二」栴目の名。

(名)

小さき魚。○新六帖「雨すぐる田の際きのさ
いの水たまり有りはつまじき世をいかにせ
ん」

齊(名)

「一」物忌。●潔齋。「二」書齋。

差異(名)

ちがひ。●差。

最(名)

一番優れたる事。

最(副)

最もすぐれて。●第一番に。

佐室(名)

山百合の古名。

差違(名)

ちがひ。●相違。●差。

劑(名)

調合したる藥。

財(名)

たから。●財寶。●財産。●金錢。

材(名)

「一」材木。「二」材料。

在(名)

其都府宿驛の近傍の村落。●近在。○「川
崎在」

さいゐ

在位(名) 天皇の御位に在らせらるゝ事。又は其年月。●御宇。●治世。

さいゐん

齋院(名)

いつきのみこを見よ。

さいゐんし

齋院司(名)

齋院の御殿の事務を執る役所。官吏は長官、次官、判官、主典あり。●い

つきのみやのついで。

さいらう

豺狼(名)

おほかみ。

さいらうしゅう

最涼州(名)

雅樂の曲名。

さいろんこ

(名)

人を親み呼ぶ詞。『いらつこに同じ。』(催馬樂)

さいはく

采配(名)

軍器の名。大將の部下を指揮するに用ふるもの。



さいはく

再拜(名)

二度拜をなす事。拜禮の丁寧なるもの。

さいばり

(名)

栴きたる様。古へ衣に摺りて染めたるもの。

さいばり

前張(名)

催馬樂中の一部の名稱。

さいばり

催馬樂(名)

雅樂の一種。歌曲のみにて舞の無きもの。樂器は吹物彈物のみにて笏拍子

を以て拍子を取る。

さいはん

再版(名)

二度目の出版。△(動)―再版す。

さいはん

再犯(名)

重ねて罪を犯す事。△(動)―再犯す。

さいばん

裁判(名)

「一」さりさばき。●裁斷。●裁決。『二』特に主權者の名によりて公式を踏みて行ふ裁判。……△(動)―裁判す。

さいはん

在判(名)

捺印ありといふ事を知らずる處に書く詞。○「家康在判」

さいばん

在番(名)

番に當たりて其所に滞在する事。裁判所(名) 裁判を行ふ役所。●法廷。

さいばんし

最果(名)

一番しまひ。●最後。●最終。△(形)―最果の。(副)―最果に。(雅)

さいばし

菜箸(名)

飯の菜を挟む箸。

さいにち

齋日(名)

物忌の日。●六齋日。

さいにん

才人(名)

文才ある人。●技藝の達人。(雅)

さいほう

再發(名)

物事の又起る事。△(動)―再發す。

さいほう

再犯(名)

さいばんに同じ。△(動)―再犯す。

さいほう

裁縫(名)

縫ひ。●針仕事。

さいほう

西方(名)

「一」西の方。「二」極樂淨土。

さいほう

財寶(名)

たから。

おこわ 濟度(名) 佛の力にて衆生を苦界より救ひ出だ

し彼岸の安樂國に到らしむる事。(佛教)

おこち 才智(名) 才氣と智識と。

おこぢ 妻女(名) 妻と娘と。

おこて 在朝(名) 在野に對して官職に在る事。●

在官。

おこちゅう 最中(名)(副) 物事の最盛なる時。

おこぢゅう 在住(名) 其所に住み居る事。●居住。△(動)

—在住す。

おこりやリヨウ 宰領(名) 荷物の運搬に附き添ひて人夫

又は荷物を保護監督する事。又は其人

おくれ 材料(名) 物を造り立つる種となるもの。

おくりやリヨウシヨウ 最涼州(名) 雅樂の曲名。

おこお 再應(副) 再度。●ふたたび。

おこおがうま 塞翁が馬(句) 禍福の頼むに足らざる

喻へ。……昔し支那の塞といふ地(北國)に

翁あり。此翁は常に吉事あれども喜ばず凶

事あれども嘆きざる人なりしが。一人の孝

行深き子と逸物の馬さを持てり。人々翁に

對して之を譽め羨めば。翁は嘆くべき事に

やならんさて喜ばず。或時此馬逃げたり。

人々惜しき事し給ひけりと言へば。翁は喜

ぶべき事にやならんさて悲しまず。後馬歸

りぬ。人々その幸なりし事を言へば。翁は

又悲むべき事にやならんさて喜ばず。後日

孝子は此馬に乗りて落ち足を折りしかば人

々來りて之を見舞ひしに翁又喜ぶべき事に

やならんさて更に悲しまず。かくて後年合

戦起りて朝廷より兵を徵せられしに孝子は

片輪にて出陣せず遂に戦死を免れたりと

の故事。

幸(名) 幸福。●幸運。●仕合。

幸木(名) 正月門松の下に飾る薪。

幸人(名) 幸福の人。●幸運の人。

(雅)

さいかい 西海(名) 〔一〕西の方の海。〔二〕四國九州。

さいかい 齋戒(名) 物忌。●潔齋。△(動)―齋戒す。

さいかい 災害(名) わざわひ。●災難。

さいかい 鳥角子(名) 木の名。葉は槐に似て枝に刺多

く秋の頃葉に入りたる實を結ぶもの。

さいかく 犀角(名) 犀の角。削りて藥用す。

さいかく 才覺(名) 才氣。●はたらき。

さいかく
さいよう

才學(名) 才氣と學識。
採用(名) 「一」採りて用ふる事。「二」願ひの

筋の許さるゝ事。●許可。……△(動)―採用す。

さいたい

妻帯(名)

妻を娶る事。△(動)―妻帯す。

さいたい

細大(名)

細き事と大なる事と。●巨細。

さいたい

最大

一番大なる事。(形)―最大なる。

さいたい

(名)

若草をいふ。(雅)

さいだん

裁斷(名)

裁判。●裁決。

さいだん

祭壇(名)

會堂にて祈禱などなす最高

さいだん

處。(基督教)

さいれい

祭禮(名)

祭の式。●まつり。

さいそ

再祚(名)

二度目の御即位。●重祚。

さいそ

最初(名)

さいしよに同じ。△(形)―さいその。

さいそ

(副)―さいその。

さいそ

才藏(名)

年始に來る萬歳の伴して滑稽の藝

さいそ

なごする男。

さいそ

採桑老(名)

雅樂の曲名。老體の人の

さいそ

鳩杖を持ちて舞ふもの。樂家にては特に秘

さいそ

曲とす。

さいそ

細則(名)

詳細なる規則。

ざいぞく

在俗(名)

いまだ僧にならず俗人として世に

ざいぞく

ある事。……出家せし後にいふ詞。

ざいぞく

先づ年(名)

さきつとしの音便。●せんね

ざいぞく

小槌(名)

小さき木槌。

ざいぞく

轉(自動四段)

さへづるに同じ。

ざいぞく

(副)

さきつころに同じ。

ざいぞく

(名)

小さき杖。

ざいぞく

災難(名)

わざはひ。●災厄。●厄難。

ざいぞく

(他動四段)

「一」叱る。●折檻する。○源氏

ざいぞく

「御乳母どもをさいなみ給ふに」

「二」せがむ。●いちめる。●びごい目に合はせる。

ざいぞく

●小言をいふ。○和泉式部日記「此童のい

ざいぞく

つにさいなむらんとおづれば」

ざいぞく

再來(名)

「一」再び來る事。「二」又此世に生

ざいぞく

れかはりて來る事。……△(動)―再來す。

ざいぞく

在來(名)

ありきたり。△(形)―在來の。

ざいぞく

(自動四段)

學者ぶる。●才子ぶる。○紫日

ざいぞく

記「文の博士さかしだらさいらき居たり」

ざいぞく

才男(名)

禁中内侍所御神樂の時猿樂を

ざいぞく

する役。

ざいぞく

一四一九

さくのかはら

賽河原(名) 冥途にて小兒の亡者が遊ぶ居るところ。地藏菩薩此處にありて保姆の役を爲す。

さくのかみ

塞神(名) 道路を守る神の名。……古は石地藏の如き石像を造りて道傍に祭りたるもの。

さくく

細工(名) 手先にて細密に物を製造する事。△(動)——細工す。

さくくわ

財貨(名) 財産と貨幣と。

さくくわ

罪過(名) 罪と過と。●つみとが。●つみ。

さくくわ

再會(名) 二度會ふ事。△(動)——再會す。

さくくわ

在官(名) 既に奉職して官に在る事。

さくくわ

妻君(名) 妻の尊稱。

さくくわ

齋宮(名) いつきのみこを見よ。

さくくわ

齋宮寮(名) 齋宮の御殿の事務を執る役所。官吏は頭、助、九、屬あり。●いつきの

さくくわ

みやのつか。

さくくわ

三枝(名) ささくさの音便。

さくくわ

三枝祭(名) ささくさまつりに同じ。

さくくわ

(名) 拆松の音便。◎松明。

さくくわ

細末(名) 細かく粉にしたるもの。

さいまつ

歳末(名) 歳の末。●歳暮。●年末。

さいまぐる

(自動下二段) 利口らしき顔をする。●差出口をする。●生意氣を言ふ。○濱松「さかしく心のさいまぐれたるやうなるが」

さいけ

在家(名) 僧侶より俗人の家を指す詞。●俗家。

さいけい

才藝(名) 才氣と藝能と。

さいけつ

裁決(名) ざりざりきする事。●裁斷。●裁定。△(動)——裁決す。

さいけつ

歲月(名) 歳と月と。●ごしつき。

さいけん

細絹(名) 古代絹織物の一種。細かに織りたる絹。

さいけん

細見(名) 一見して明細に知り得る様にしたる圖書。

さいけん

實際(名) はて。●かぎり。

さいふ

財布(名) 金銀を入れて携る袋。

さいふ

宰府(名) 大宰府の略。

さいぶつ

才物(名) 才氣のある人物。●才子。

さいぶん

祭文(名) 神祭又は靈祭の時朗讀する文章。

さいふく

祭服(名) 神祭を掌る人の着る衣。

さいご

最期(名) 死ぬる時。●臨終。●今は。

さいご

最後(名) 一番あと。●最終。△(形)——最後の。

さいこん

〔副〕最後に。
再建(名) 神社佛閣など再び建立する事。△

さいこう

〔動〕一再建す。
再興(名) 一度廢たれたる物事を興す事。△

さいかう

〔動〕一再興す。
再考(名) 再度考へ直す事。△(動)一再考す。

ざいごふ

罪業(名) 罪に同じ。(佛教)

ざいがう

在郷(名) 在に同じ。

ざいこく

西國(名) 〔一〕西の方の國々。〔二〕九州地方。

ざいえん

再縁(名) 二度目の縁組。

ざいで

裁出(名) 織物の切れ端。●裁ちばづし。●切れ。(雅)

さいてん

祭典(名) 祭禮。●まつり。

さいてん

西天(名) 西方淨土。(佛教)

さいあい

最愛の(形) 最も深く愛するさゝころの。

さいさく

再再(副) 幾度も。●度々。

さいさる

〔副〕衣服などのさわ／＼と動きて音のする

さいさる

有様。(萬葉)

さいさる

(形。形狀言シク活) さぬ／＼とする有様。

さいせん

再三(副)

さいせん

二度も三度も。●再再。

さいさん

財産(名) 身代。●身上。●資産。

さいさく

細作(名) 忍びのもの。●問者。●問諜。

さいき

才氣(名) 才。●はたらしき。

さいぎ

猜疑(名) 疑ひぶかし事。

さいぎ

裁許(名) 裁斷して許可する事。●裁可。△(動)

さいぎ

一裁許す。

さいぎ

再舉(名) 再度其事を舉行する事。△(動)一再

さいぎ

舉す。

さいきやう

在京(名) 都の地に上り居る事。△(動)

さいきん

一在京す。

さいきん

在勤(名) 其土地に在りて勤務する事。○「巴

さいきん

里在勤」△(動)一在勤す。

さいめい

罪名(名) 犯罪の名稱。

さいめい

西面(名) 〔一〕西向の方。〔二〕後鳥羽院の御

さいめい

所に設置せられたる守護の武士。……北面

さいめい

を參考せよ。

さいみ

細美(名) 布の一種。――さよみに同じ。

さいみつ

細密(名) こまき事。●緻密。●精密。●

さいみつ

綿密。△(形)一細密なる。(副)一細密に。

さいみつ

妻子(名) 〔一〕妻と子と。●つまい。〔二〕妻又

さいみつ

は妾。○源氏「なつかしきさいしと打ち頼

さくし

まんじに盛衰「いかなる人のさいしならん」と行末見たく思ひければ」

釵子(名) 古代貴婦人の髪飾の具。金屬製の丸形平打に三本の角ある如きもの。(圖)...

實髻を參考せよ。



さくし

祭司(名) 猶太教にて神を祭る職の名。

さくし

祭祀(名) 神のまつり。

さくし

才子(名) 才氣のある人物。

さくし

最初(名) 一番初め。●かばきり。△(形)―最初の。(副)―最初に。

さくし

在所(名) 「一」在るところ。「二」在。

さくし

宰相(名) 「一」國政を執る主宰の人。「二」參議の異名。

さくし

最小 一番小なる事。(形)―最小なる。

さくし

妻妾(名) 妻と妾と。

さくし

最上(名) 第一等。△(形)―最上の。(副)―最上に。

さくし

罪障(名) 極樂に往生するの故障となる罪。(佛教)

さくし

罪狀(名) 罪の次第。

さくし

罪狀(名) 罪の次第。

さくし

在城(名) 城に居る事。

さくし

採桑老(名) さいさうらうに同じ。

さくし

最勝講(名) 古代禁中公事の一つ。五月の中に五日間、かれて日次を撰びて東大、興福、延暦、園城、四個大寺の優れた僧を清涼殿に召し最勝王經を講ぜしめらるゝもの。

さくし

在職(名) 其職務に在る事。

さくし

祭日(名) 「一」祭を行ふ日。「二」國祭を行はる日。

さくし

彩色する。(他動四段) 彩色する。●いろどる。(榮花)

さくし

祭式(名) 祭の儀式。

さくし

彩色(名) いろどる事。△(動)―彩色す。

さくし

祭主(名) 「一」神祭を行ふ主任者。「二」伊勢大

さくし

神宮の神官の主任者。

さくし

採集(名) 「一」採り集むる事。「二」特に金屬動植物等其學科の標品を集むる事。

さくし

△(動)―採集す。

さくし

才筆(名) 「一」文章詩歌等のすぐれたる書き方。「二」すぐれたる作者。

さくし

方。[一]すぐれたる作者。

さいもん

祭文(名) 「一」さいふんに同じ。「二」一種の

さいもく

俗曲。三味線法螺貝などを用ひて語るもの。

さいもく

細目(名) 細密なる條目。

材木(名) 建築其他工事の材料として用ふる

さいせ

木。●木材。

在世(名) 「一」生きて世に在る事。●存命「二」

さいせい

特には釋伽の存世中。○謠曲「在世の昔」

さいせい

祭政(名) 神を祭る事と民を治むる事と。

再生(名) 一旦死にかゝりて助かる事。●二

さいせい

度生れ、ばる事。

さいせい

財政(名) 財産の運轉整理。

さいせん

祭政一致(句) 宗教上の權力と政治上の

さいせん

權力と同一主權者に歸するをいふ。

さいぜん

賽錢(名) 神社佛閣に詣で、奉納する錢。

最前(副) もすこしまへ。●先程。●先刻。△

さいす

(形)―最前の。

さいす

祭主(名) さいししに同じ。

さいば

鯖(名) 魚の名。形鱈に似て小さく色の一層青き

もの。

散飯。生飯(名) 盛りたる飯の上に更に小さく盛

り添へたる飯。僧侶は食事の著を取る時先

さば

婆娑(名)

しやばに同じ。

さば

(副)

さらば。○源氏「侍従の君呼び出ていさば

さば

参り給へさいへば」新古今「身にがへてい

さば

ささば秋を惜しみ見んさらでも脆き露の命

さば

な

さば

差配(名)

所有主と借主との間に立ちて貸地貸

さばかり

家等の事を取り扱ふ事。又は其人。

さばかり

(副) そのくらゐ。●そればかり。●それは

さはた

左様に又。(雅)

さばれ

(副)

さもあらばあれの約。◎まいよ。○落窪

さばく

(副)

「いかにせんさわび給へば。さばれ明け給へ」

さばく

沙漠(名)

砂原のみにして草木の生えぬ廣原。

さばく

捌(他動四段)

「一」結び固まりたる物事を解

さばく

く。「二」取扱ふ。「三」裁判する。「四」賣り弘

さばく

むる。

さばく

捌(自動下二段)

おのづから捌くやうになる。

さばく

(他動四段)

捌く。(著聞)

さばへ

五月蠅(名) 五月頃に發生する蠅。……其聲さ

わがしきものなれば荒び騒ぐ惡しき神などの形容に用ふ。

さばき

捌(名) 「一」捌く事。●捌き方。●取扱。「二」

裁判。

さばきがみ

捌髪(名) 解き散らしたる髪。

さばしる

(自動四段) 走る。……魚などに云ふ。

さばぬり

(名) 丹塗^{にぬり}に同じ。

さばる

(自動一段) 似るに同じ。○頼政集「君にあひ

て歸りにしより昔せし戀にさにたる物をこ

そ思へ」

さばいふ

(枕) 赤き色に出づるの意にて顔又は其物

の赤くつや／＼しきを賞め云ふ形容の枕

詞。君、大君、妹、少女、色、紅葉、紐などに

かゝる。(萬葉)

さばい

左程(副) それほど(又)——左程に。

さばん

(名) 木の名。橘の類。其實は柚に似て大きく

味甘きもの。●唐九年母。

さばう

左方(名) 唐樂の稱。……右方を參考せよ。

さばふ

作法(名) 儀式。●禮法。

さばふし

(形。形狀言シク活) 儀式めきてある。(枕)

さばてん

霸王樹(名) 熱帶植物の名。葉なくして小

き刺あるもの。

さばす

(他動四段) 干すに同じ。○夫木「玉川や遠の

砧にならずなりこやさばしたる手つくりの

袖」

さばく

差別(名) しやべつに同じ。

さばく

(副) さるべくの略。◎然るべく。(雅)

さばき

(形) さるべきの略。◎然るべき。(雅)

さばり

里(名) 「一」人家の集まりたる所。「二」禁中に對

して禁外の家を云ふ。「三」嫁したる家より

其實家を云ふ。「四」色里。●遊廓。

さばい

(副) 「一」さつこさらくさあ／＼かさ／＼など

云ふ如き音を形容する詞。○ささ吹く風」

「ささ降る雨」「二風などの渡る如く俄に物

の廣がる有様。○ささにはひくる梅の」面

もさ赤みて」

さばい

里居(名) 里住に同じ。(雅)

さばいぬ

里犬(名) 獸の名。山犬に對して普通の犬を

云ふ。

さばい

里芋(名) 野菜の名。山の芋に對して普通の

芋をいふ。

あやふし 悟。覺(名) 「一」あやふし事。「二」迷の心を脱して生死の真相を明らかにする事。(佛教)

あやふし 覺。悟(他動四段) 「一」氣が付く。●察して知る。「二」佛教上の悟を得る。

あやふし 里輪(名) 里の周圍。●里の近邊。

あやふし 里神樂(名) 禁中にて行はるゝ内侍所の御神樂に對して禁中以外の神社に奏するものを云ふ。

あやふし 里歸(名) 婚禮後三日目に父母の家に歸る儀式。●里開。

あやふし 里内裏(名) 皇居以外の建物に御所に代用して天皇のおはします時の稱へ。

あやふし 砂糖(名) 食品の名。甘蔗などより製し出したる甘味のものを。

あやふし 座頭(名) 剃髮の盲人にて琵琶、琴、三味線を弾き按摩鍼治などをするものゝ稱へ。

あやふし 甘蔗(名) 草の名。蜀黍に似て大きく其莖より砂糖を製出するもの。

あやふし (自動上二段) 俗である。●野鄙である。

あやふし 乳もて養育する爲めに預かりたる子。又は同じやうに預けたる子。

あやふし 論(名) 「一」あやふし事。●説論。●訓戒。「二」

あやふし (形。形狀言ク活) 神の御告。●神託。●託言。する。●鋭敏なる。●し。し。

あやふし 俗(名) 雅の反對。俗。●野鄙。

あやふし 里人(名) 「一」其村里の人。●土人。「二」官吏官女ならずして民間に住む人。

あやふし 俗歌(名) 「一」狂歌。●(二)俗曲。

あやふし 俗言葉(名) 俗語に同じ。

あやふし 論(他動四段) 道理を述べてささる。●説論する。●訓戒する。

あやふし 里住(名) 禁中に上りて住むを内住といふに對して。官人官女などの私宅に下りて住むをいふ。

あやふし 幸(名) 「一」さいはひ。●幸福。「二」獵。●獵の獲物。(古)

あやふし 幸(自動四段) 幸福を與ふる。(雅)

あやふし 左中辨(名) 官名。……辨を見よ。

あやふし 左中將(名) 左近衛中將の略。……中將を見よ。

さり (名) しゃりに同じ。

さり (自動ラ變) 然り。●左様である。

さり (名) じゅりに同じ。

さりがたし (形。形状言ク活) 止むべからざる。●避くべからざる。

さりながら (副) 然れども。●さはいふものゝ。●しかしながら。

さりや (副) それよ。●そうじゃ。○源氏「簾の下よりやたら及びて御袖をひかへつ。女さやりあな心うと思ふに」

さりやく (作略(名) 勝手なる取計らひ。●越權の處置。

さりげなし (形。形状言ク活) そんな様子を見せぬ。●そ知らぬ顔で居る。

さりきらひ (去嫌(名) 「二」俳諧にいふ詞。忌み嫌ひて用ふまじき言句。「二」人の好き嫌ひ。

さりじやう (去狀(名) 離縁狀。

さぬ (自動下二段) めに同じ。●寝る。●眠る。

さぬく (枕) 野の鳥の意。雉子の枕詞。(記)

さぬわね (讃岐圓座(名) 讃岐の國より産する圓座。(著聞)

さる (猿(名) 獸の名。謂はゆる四手族にして時として

は歩行し言語を解するものあり。其種類多し。

申(名) 十二支の一つ。……申の時は午後四時。申の方角は西南の西によりたる方。

(形) 其。●某の。●或る。○「さる事」「さる人」「さる點」

去(自動四段) 退く。●遠ざかる。

去(他動四段) 退くる。●追ひやる。●除く。

曝(自動下二段) 雨に打たれ又は日に照らさる。

笹(名) 丸く編みたる小さき籠。食品など入るもの。

戯(自動下二段) 戯むる。●しゃれる。●ふざける。

(自動四段) ぞあるの約。○「人にざりける」(歌詞)

(助動四段) すあるの約。○「思はさる辛ひ」招きざれば來らず」

(副) 然るに。

(副) それにしても。●それに付きても。

(副) そうして居る内に。●其内に。

さるほどに

さるにても

さるに

さる

さる

さる

さる

さる

さる

さる

さる

さる

やゐるぼろ

猿類(名) 面類の一種。(圖)

やゐるへ

(副) 然るべく。●相當に。●適當に。●よきやうに。

やゐるぢや

(形) 然るべき。●相當の。●適當の。●都合よき。



やゐるぢや

猿智恵(名) 淺き智慧。●小才。

やゐるがぜ

(名) 日蔭の憂の一名。

やゐるま

(副) 「一」然るは。●それは。●それに付きては。●その譯は。「二」さても。……(雅)

やゐるが

(自動四段) 滑稽の藝をする。●おどけを言ふ。(雅)

やゐるかく

猿樂。申樂(名) 「一」散樂さんがくの轉。◎禁中内侍所御神樂の餘興として演ずる滑稽の藝。後世の狂言の類。「二」能樂。「三」能役者。

やゐるがし

(形。形狀言ク活) 小利口である。●ちよこさいである。

やゐるなめり

猿滑(名) さるすべりに同じ。(雅)

やゐるのしかけ

猿腰懸(名) 菌の一種。肉厚く固く白くして古木に生ずるもの。

やゐるづわ

猿轡(名) 聲の立てられぬ様に手拭などにて口を縛る事。

やゐるまろ

猿丸(名) 猿の異名。(宇治)

やゐるまはし

猿廻(名) 猿に藝をさせて錢を乞ひ歩くもの。●猿曳。

やゐるまた

猿股(名) 股引の一種。股引の半程の短きもの。●猿股引。

やゐるまじ

(形。形狀言シク活) 「一」然るべからぬ。●そうありてはならぬ。●そうは無い筈である。「二」遁れられぬ。

やゐるがう

猿樂(名) 「一」さるがくの音便。「二」轉じては滑稽。

やゐるひき

猿曳(名) さるまはしに同じ。

やゐるもの

(名) 左様の人。●然るべき人。●一かどの人。

やゐるものにて

(副) 勿論にて。○枕「藤をばさるものにて上の御宿世こそめでたけれ」

やゐるもひき

猿股引(名) 猿股に同じ。

やゐるすべり

猿滑(名) 木の名。夏より秋にかけて赤き花咲くもの。其皮きはめて滑にして猿の手もすべるといふ意味にて名づく。●百日紅。

やゐる

竿。棹(名) 「一」すべて細長き形の物の稱。○「秤の棹」「長持の棹」「船の棹」「カステラの

棹（二）特には竹にて作り水の底に突き立て、船を押し進むの具。（三）特には三味線にて糸を張り渡して左の手にて持ち抑ふところ。

さな

眞青（名） 色の名。あなと同じ。△（形）！さなる。（又）！さなの。（副）！さなに。

さなをうしろ

一昨昨年（名） さきをさし略。

さなをぐる

（自動四段） をぐるに同じ。（雅）

さなをどめ

早少女。早乙女（名） 早苗を取る女。●田植女。

さなをた

早穂田（名） 早く稲穂の出でたる田。（壬二集）

さなをなぐる

（名） さは矢にて矢を投ぐる如き瞬間の意。○古歌「何事も思ひ捨てたる身を安き

さななぐるまの夢の世なれば」

さなをう

蔵王（名） 佛教の神。我國にては吉野金峰山に鎮座し。忿怒の姿を顯はして右手に三鉗を握り臂を怒らし。左手は五指開きて鴈を押さへ。三眼明かに忿って魔障降伏の相を現じ。兩足上げ低れ天地經緯の徳を表はすといふもの。

さなのうた

棹歌（名） 舟子の謠ふ唄。●舟歌。

さなのま

棹間（名） 古へ禁中小板敷の西の妻にありたる間の名。

さなをさす

棹（自動四段） 「一」棹にて舟を遣る。「二」轉じて舟に乗る。

さなをし

小男鹿（名） 牡鹿に同じ。

さなをひめ

佐保姫（名） 大和佐保山に鎮座して春を司る女神。

さわ

茶話（名） 茶飲噺。●ちゃわ。

さはり

澤（名） 草の生ひたる沼。多き事。●澤山。（形）！さはなる。（副）！さはに。

さはり

障（名） 「一」故障。●差支。「二」あたり……病氣に云ふ。「三」月經。

さはりのもの

障物（名） 月水。

さはる

障（自動四段） 「一」觸る。●あたる。「二」差し支へる。●邪覓になる。「三」時候飲食などのため病氣になる。●あたる。

さわがし

騒（形）形状言シク活。物靜ならぬ有様。●やまし。●さうくし。

さわがす

騒（他動四段） さわがしむる。●騒動させる。

さはりた

澤田（名） 澤の如き田。

さわたる

(自動四段)

渡るに同じ。(雅)

さはたがは

澤田河(名)

催馬樂の曲名。

さわだつ

(自動四段)

騒ぎ立つ。

さはら

鯖(名)

魚の名。鯖に似て大きく脂氣多きもの。

さはら

榎(名)

木の名。檜に似たるもの。

さわらび

早蕨(名)

若き蕨。

さわぐ

騒(自動四段)

さわがしくある。●さわ／＼する。●安からずにある。●靜ならずにある。

●騒動する。

さわやか

爽

はつきり。●さつぱり。●せい／＼。●爽快。(形)―さわやかなる。(副)―さわやかに。

●騒動する。

さわやぐ

(自動四段)

さわやかになる。●せい／＼する。●さつぱりする。

さわわ

(副)

さわやかに。●せい／＼。●さつぱり。●(又)―さわ／＼。

さわわ

(副)

さわやかに。●せい／＼。●さつぱり。●(又)―さわ／＼。

さわわ

(副)

さわやかに。●せい／＼。●さつぱり。●(又)―さわ／＼。

さわ

騒(名)

騒ぐ有様。(又)―さわ／＼。●騒動。●混亂。

さわし

(名)

矢の一種。拭ひて赤漆掛たるもの。

さか

釋迦(名)

佛の名。しゃく。

さか

坂(名)

勾配のある道路。●山を上り下りする路。

さか

尺(名)

しゃくの古言。十。

さか

斛(名)

しゃくの古言。十斗。

さか

酒(形)

酒の。○「酒藏」「酒屋」

さが

性(名)

性質。●天性。●ならじ。

さかひ

境。堺(名)

相接する所。●合せ目。●分れ目。●けいはい。

さかひ

う

書法の一派。牡丹花育相の書

さかひ

月代(名)

さかひに同じ。

さかひ

罪目(名)

さかひに同じ。

さか

逆鱗(名)

船の詞。舳先に鱗を附けて舟を後ろに進まする事。

さか

逆羽(名)

もちれて逆になりたる鳥の羽。

さか

酒旗(名)

酒屋の看板の旗。

さか

逆磔(名)

徳川時代刑罰の名。磔の一種。罪人を逆にして行ふもの。

さか

酒林(名)

酒屋の看板に釣りたる杉の葉の球。

さか

榮え映ゆる事。●榮ゆる事。△(副)―

さか

獸などの足の方より皮を剥ぎ去る

さか

逆剥(名)

獸などの足の方より皮を剥ぎ去る

さか

逆剥(名)

獸などの足の方より皮を剥ぎ去る

さか

逆剥(名)

獸などの足の方より皮を剥ぎ去る

事。

さかばしら

逆柱(名) 材を逆に用ひて立てたる柱。

さがにくし

(形。形狀言ク活) さがなくにくし。○拾遺「いにしも何にはふらん女郎花人の物いひさがにくき世に」

さかほかひ

(名) 酒を以て祝意を表する事。

さかどり

坂鳥(名) 朝起きて山坂の空を越えゆく鳥。

さかどじ

(雅) 酒杜氏(名) 酒を造る人。

さかどの

酒殿(名) 「一」禁中にて酒を醸造する御殿。

さかり

盛(名) 榮ゆる景最中。

さがり

下(名) 「一」下がる事。●下がりたる物。「二」昔し時刻に云ひたる詞。其時を過ぎたる事の稱へ。○「七つ下り」末の下り」

さがりば

下端(名) 古へ女の髪を垂れ下りたる末。●其一部分を短く切りて肩の邊に垂らしたる其端。

さがりぐも

下蜘蛛(名) 蜘蛛の巣を懸けて軒などに垂れ下るを云ふ。

さがりまつ

下松(名) 枝の下を向きて垂れたる松。

さがりふち

下藤(名) 紋の名。下を向きて垂れたる藤の花の形。

さがりふすべ

懸疣(名) 瘤の古名。(和名抄)

さがりこけ

下苔(名) 苔の一種。日蔭の臺の一名。深山の木枝などより垂れ下るもの。

さかる

盛(自動四段) 盛になる。

さがる

放(自動四段) 遠さかる。●離る。

さがる

下(自動四段) 「一」下に行く。●下に向ふ。●くだる。●垂る。●「二」貴人の處より退出する。「三」價の低くなる。

さかがり

醜(名) 酔ひて怒り狂ふ事。●酒狂。●醉狂。(和名抄)

さかがめ

酒瓶(名) 酒を入る瓶。

さかがみ

逆髪(名) 「一」髪を逆に捫む事。「二」髪の中の逆立ちて生ゆる事。

さがやう

嵯峨様(名) 書法の一派。定家流に同じ。

さかだい

酒代(名) 酒の代金。●酒手。

さかだち

逆立(名) 逆に立つ事。

さかだる

酒樽(名) 酒を入り置く樽。

さかだつ

逆立(自動四段) 髪の上に向きて立つ。……大に怒る時などの形容に云ふ。

さかだな

酒店(名) 酒を賣買する商店。

さかれがへ

(句) 放らんや放れずの意。○萬葉「東路や佐野の舟橋さりはなし親しきくれど吾はさかれがへ」

さかつぼ

酒壺(名) 酒を入れる壺。

さかつる

坂弦(名) 古へ伊勢の坂の下より産出せし弓の弦。

さかつくり

酒造(名) 酒を造るを業とする人。

さかつき

盃(名) 「一」酒をつぎて飲む器の總名。「二」特に木製にて朱塗にしたるもの。「三」盃を献酬するの式。

さかな

肴(名) 「一」酒を飲む時に添へて食ふ食品。「二」魚類。

さかなうたひ

肴謡(名) 酒席にて盃を差したる時肴の代りに歌ふ謡曲。

さかなめ

(名) わるき目。●よからぬ見方。(大鏡)

さかなみ

逆浪(名) 風潮流などに反對して打ち寄する浪。

さかなし

(形。形状言ク活) よからぬ。●びびみたる。●いちのわるき。●口のわるき。●日やまし。

さからいふ

逆(自動四段) 手向ふ。●反對する。●抵抗する。

さかん

さかりに同じ。(形)―さかんなる。(副)―さかんに。

さかむかへ

坂迎(名) 伊勢參宮より京都に歸る人を逢坂の關まで迎に行く事。

さかむかへ

酒迎(名) 酒を持參して旅路より歸る人を迎ふる事。

さかふ

堺(他動四段) 堺を爲す。○玉葉「目にかけて幾日になりぬ東路や三國をさかふ富士の芝山」

さかふ

逆(自動四段) さかりふに同じ。

さかふ

榮(自動下二段) さかゆに同じ。

さかのぼる

遡(自動四段) 流れに逆らひて上る。●跡へ跡へこのぼる。

さかく

座樂(名) 座して奏する雅樂。……立樂に對して云ふ。

さかぐら

酒藏(名) 「一」酒を醸造する藏。「二」酒を貯へ置く藏。

さかやき

月代(名) 頭髮の中を剃り開く事。

さかまく

逆卷(自動四段) 浪さ潮流さ激してくる

さ巻く様に廻る。

さかまくら

坂枕(名) 禁中にて行はるゝ御神事の時神に奉る枕の名。◎床斜にして枕の處は坂をなしたる故に云ふ。

さかぶね

叫(自動下二段) さけぶに同じ。

さかぶね

酒槽(名) 酒を入れ置いための大きな木箱。

さかぶね

酒事(名) 酒盛。●酒宴。●宴會。

さかぶね

酒薦(名) 酒樽を包みたる薦。

さかえ

榮(名) 〔一〕繁昌。●榮華。〔二〕神の榮光。(基督教)

さかて

酒手(名) 酒代の錢。

さかて

逆手(名) 又物など逆に持つ事。

さかち

逆 さかさま。(形)――さかさま。(副)――さかさまに。

さかさがは

逆河(名) 海に遠き方に向ひて流るゝ川。

さかさま

逆 さかさま。(形)――さかさま。(副)――さかさまに。

かしま。(形)――さかさまなる。(副)――さかさまに。

さかし

柿。賢木。梔(名) 〔一〕古は榮木の意にて常磐木の總名。〔二〕後世は一種の木の名。柿の葉に似て小さく紫色の丸き實を結ぶもの。專

ら神祭の用に供せらる。〔三〕神樂の曲名。

さかゆ

榮(自動下二段) 勢の盛になる。●繁昌する。●繁榮する。

さかゆく

(自動四段) 榮え行く。

さかみつ

(自動四段) 酒宴をする。(萬葉)

さかし

賢(形。形狀言シク活) かしこし。●利口な。(副) そうじや。(雅)

さかし

(形。形狀言シク活) けはし。●險阻なる。

さかし

酒代(名) 酒を買ふべき錢。●酒手。

さかし

酒鹽(名) 料理の詞。煮物に味を付くる爲に加ふる酒。

さかし

(自動四段) 賢しき振をなす。●かしこぶる。●かしこたてをなす。(雅)

さかし

賢立(自動四段) さかしがるに同じ。(雅)

さかし

かしこたて。●生意氣。(形)――さかしらなる。(副)――さかしらに。(動)――さかしらす。

さかし

座頭(名) 芝居など的一座の長。●座長。

さかし

逆 さかさまに同じ。(形)――さかしまなる。(副)――さかしまに。

さかし

賢人(名) さかしき人。●かしこき人。

さかし

さかびたり

酒浸(名) 不斷酒に酔ひ居る事。

さかもり

酒盛(名) 酒宴。

さかもぎ

逆茂木(名) 城、砦、關所などにて枝附の木を

逆に地上に立て

列ね垣の如くに

して敵の來襲を

防ぐもの。(圖)

さがす

搜(他動四段) 尋ね

求むる。

さよ

小夜(名) 夜に同じ。

さよはひ

(名) よはひに同じ。妻になれと誘ひ招く事。

(記)

さより

針魚(名) 魚の名。頭尖りて身の丸き小魚。

さよなか

小夜中(名) 夜半に同じ。

さよう

作用(名) はたらき。●しわざ。

さやう

左様(副) 然の如く。●其通り。(又)——左様に。

(形)——左様の。

さよふくら

小夜枕(名) 夜寐る時にする枕。

さよふく

小夜更(自動下二段) 夜更くに同じ。

さよころも

小夜衣(名) 夜着て寐る衣。

さよあらし

小夜嵐(名) 夜嵐に同じ。



さよみ

質布(名) 布の一種。細き糸にて織りたるもの。

さよしぐれ

小夜時雨(名) 夜降る時雨。

さよすがら

(副) 夜すがらに同じ。(雅)

さた

沙汰(名)

〔一〕評議。●議決。〔二〕官令。●公布。

〔三〕報知。●音信。〔四〕評判。●取沙汰。...

△(動)——さたす。

さた

薩埵(名)

さつたに同じ。(佛教)

さた

(名) 榮螺の古名。(舊馬樂)

さだいべん

左大辨(名) 官名。……辨を見よ。

さだいし

左大史(名) 官名。……史を見よ。

さだいしやう

左大將(名) 左近衛大將の略。……大

將を見よ。

さだいじん

左大臣(名) 官名。太政大臣を補佐して右

大臣と共に國政を執る役。●一の上。●ひ

だりのおほいまうちぎみ。

さだでう

沙陀調(名) 雅樂の調子の名。

さだか

はつきり。●判然。●明瞭。●たしか。△(動)

——さだかなる。(副)——さだかに。(雅)

さたん

嗟嘆(名) 嘆息。●感心。△(動)——嗟嘆す。

さたん

左袒(名) 肩を持つ事。●味方する事。●賛成

する事。△(動)——左袒す。

さたむ

定(他動下二段)

さたまるやうにする。●きめ

る。

さたのかぎり

(句)

言語を以て論ぜられぬ程の不都合

●以ての外のこと。

さたまり

定(名)

「一」定則。●習慣法。「二」決定。●終

結。

さたまる

定(自動四段)

きまる。●決定する。●落着

する。

さたえ

榮螺(名)

さいえに同じ。(催馬樂)

さたさたど

(副)

明らかに。●たしかに。(雅)

さため

定(名)

さためたる事。●規定。●掟。●法度。

●規則。

さためて

定(副)

「一」屹度。●必ず。「二」多分。

さたもの

(名)

御定め。●禁制。●法度。(催馬樂)

され

戯(名)

たばむれ。●ふざけ。●おどけ。

されい

茶禮(名)

茶の湯の式。

されば

(副)

然れば。

さればむ

(自動四段)

戯るい。●しゃれる。●おどけ

る。(雅)

されど

(副)

然れども。

されつす

座列(自動サ變)

座しつらなる。●列座する。

ざれうた

戯歌(名)

狂歌。

ざれくつがへる

(自動四段)

ひっくりかへりてふざけ

る。●甚しくおどける。(雅)

ざれどぞ

戯言(名)

たばむれの言葉。●滑稽の言語。

ざれかうべ

觸謔(名)

風雨に曝されたる頭の骨。●ど

くる。●しゃりかうべ。

ざれもの

戯者(名)

滑稽家。

ざぞ

囁(副)

「一」左様にぞ。○源氏「げにさぞ思さる

らん」「二」どのやうにぞ。●いかほごい。○

「さぞ寒からん」

ざそり

蠅蟻(名)

虫の名。自我蜂。(和名抄)

ざぞかし

(副)

さぞに感詞のししの添ひたる詞。さ

ぞに同じ。

ざぞな

(副)

さぞに感詞のなの添ひたる詞。さぞに

同じ。

ざそふ

誘(他動四段)

いざなふ。●ひきたす。●連れ

たす。●誘導する。

ざびう

座像(名)

座し居る姿の佛像。

ざそく

早速(副)

さつそくに同じ。即座。

ざぞや

(副)

さぞに感詞のやの添ひたる詞。さぞに

同じ。

さう

札(名)

紙幣。●楮幣。

さう

冊(名)

綴ちたる書物。

さう

雜(名)

入りまじり。

さう

(副)

粗末。(形)―ざつもの。(副)―ざつに。(俗)

さう

(副)

淡泊に。(又)―さうばりも。(二)少しも。●

さう

殺伐(名)

氣風舉動などの荒々しく殺氣を帯びたる事。

さう

雜駁(名)

入り交る事。●ごちゃつく事。△(形)―雜駁なる。(副)―雜駁に。

さう

雜報(名)

新聞にいふ詞。社會種々の出來事の報告。

さう

風(副)

風の一吹き吹く有様。

さう

(副)

ざつに。●粗末に。●不丁寧に。

さう

雜沓(名)

人の多く込み合ふ事。●混雜。△(動)―雜沓す。

さう

獵男(名)

山獵を業とする人。●獵人。●獵師。

さう

獵男の笛(名)

獵師の持つ笛。●鹿笛。

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

さう

薩埵(名)

菩薩に同じ。◎智を以て上佛道を求む

ざた

雜多

種々様々に入り交りたる事。(形)―雜多の。

ざさう

(副)―雜多に。

ざさう

雜草(名)

生ひ茂りて他の植物を害する種々の草。●名も無き小草。

ざさう

早速(副)

速に。●急に。

ざさう

索(名)

索の繩に同じ。(佛教)

ざさう

授(他動下二段)

「一」物を與ふる。●手渡しする。●傳授する。●傳ふる。

ざさう

遺矢(名)

山獵に用ふる矢。(雅)

ざさう

薩摩芋(名)

甘藷(名) 野菜の名。芋の類にして味甘きもの。◎はじめ薩摩より諸國に傳へたる故の名。又その元は琉球より傳へたる故琉球芋ともいふ。

ざさう

薩摩芋(名)

食品の名。種々の野菜に島の肉など入れたる汁。

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

ざさう

殺風景(名)

風景を殺ぐやうなる事。●興を醒ますほど無風流なる舉動又は言語意思。△(形)―殺風景なる。(又)―殺風景の

(副)―殺風景に。

殺穀(名) 二種以上の穀物の交りたる事。

颯颯(副) 風などの吹く聲。(又)―颯々。

五月。皐月(名) (一)いづつ。(二)五月躑躅の略。

殺氣(名) 人を殺さんとする如き様子。●殺伐の風。

風。

雜記(名) 雜事の記録。

五月晴(名) 五月雨の晴れたる時。

雜居(名) 人種又は社會を異にする人の入り雜りて住居する事。

五月躑躅(名) 木の名。躑躅の一種。陰曆五月頃花咲くもの。

五月鏡(名) 支那にて昔し五月五日江南の船中にて鏡を鑑たる故事。其名を百鏡鏡といふ。

五月玉(名) 藥玉の異名。

陰曆五月頃の闇の夜。

さみだれに同じ。

山獵に用ふる弓。(雅)

綴るたる書物。

冊子(名)

綴るたる書物。

綴るたる書物。

雜誌(名) 種々の事を記載し號を逐ひて發兌する冊子。

殺傷(名) 殺す事と傷つくる事。

官廳にて使役せらるゝ下吏。

雜費(名) 種々の入費。●雜用。

獵人(名) 獸獵を業とする人。●さつた。●獵師。

察(他動サ變) 想像して知る。●推量する。●推察する。●思ひ遣る。●同情を表する。

核(名) 果物などの中にある堅きもの。●たれ。

札(名) 縫ひ並べて鐵に造る金屬の小さき薄札。

(名) 寐床。(記)

五味(名) 蔓草の名。葉は冬も青くして夏花咲くもの。其皮を煮て髪に塗れば僻をなほす効あり。●五味子。

五味(枕) のち逢ふ絶ゆなどの枕詞。(萬葉)

根莖。●莖の根。(萬葉)

相模(國の名)の枕詞。(記)

もな。●真中。●真盛。●さいちゆ

最中(名)

さねがや

さねざし

さなか

さつす

さつじ

さつし

さつび

さつびざ

さつす

さつす

さなかつら

(名) さねかつらに同じ。

さなかつら

(枕) さねかつらに同じ。

さながら

(副) 「一」そのまゝ。●そっくり。「二」あた

かも。●ちゅうご。「三」皆々。●一同に。

さなだむし

條蟲(名) 人の腸内に寄生する一種の長き

虫。眞田組に似たるもの。

さなだひも

眞田組(名) 木綿の平打の紐。

さなへ

早苗(名) 「一」田植をする時の稲苗。「二」田植。

さなへつき

早苗月(名) 陰曆五月の異名。

さなび

蛹(名) 「一」青虫の類の變じたるもの。……是

より又變じて蝶或は蛾となるなり。「二」蠶

の蛹。

さなま

繹(名) わでの一名。

さなきたに

(副) 左様に無くとも。

さなみ

小波(名) さなみ。

さら

皿(名) 平たくして淺き器。

さらひ

竹把(名) 竹にて熊手の如く作り木の葉など搔

き寄するもの。

さらひ

渡(名) 繰返して習ふ事。●復習。○「踊の渡ひ」

さらいねん

三來年(名) 來年の來年。

さらうけつ

三來月(名) 來月の來月。

さらば

(副) 然らば。●そんなら。

さらば

(感) 人に別るゝ時にいふ詞。左様なら。○狂

言「さらば」

さらばよ

(感) さらばによの添ひたる詞。○謡曲「さら

ばよ常世」

さら

更(副) 「一」あらたに。●別に。「二」少しも。●

ちよつとも。

さらばふ

(自動下二段) 木などの雨露に曝されて肉な

く骨ばかりになりたる如き有様になる。●

骨と皮さになる程瘦する。●甚しく瘦する。

さらさら。●更に。●きつぱり。●さつぱ

り。(又)「さらり」。

さらだに

(副) さらでだにに同じ。

さらがへる

更返(自動四段) 更に立ち戻る。●更に始

に返る。○源氏「さらがへりてまめやかに

聞え給ふ」

さらぞうじ

婆羅双樹(名) 古へ天竺にありしさいふ木

の名。皮青白く葉甚光潤にして衆木よりも

高く聳え必ず二本づゝ並び生ずるもの。釋

迦涅槃の時其木悉く枯れて忽ち白色に變ぜ

しと云ふ。(佛敎)

さらなり

(句)

いふもさらなりの略。◎いふまでもなし。○枕「月の頃はさらなり暗もなほ」

さらふ

浚(他動四段。又下二段)

習する。

「一」掃除する。「二」復

さらけ

淺鑿(名)

抄)

食器の名。鑿に似て淺きもの。(和名

さらへ

竹把(名)

さらひに同じ。

さらへ

浚(名)

さらひに同じ。

さらでに

(副)

そう無くてさへ。●さなくとも。●

さなきだに。

さらぬ

更紗(名)

の。

金巾に種々の色にて形を書きたるも

さらさら

更更(副)

更に更に。●少しも。●夢にも。

さらさら

(副)

物の摩れ合ふ音。(又)ーさらーと。

さらさら

(副)

速に進む有様。(又)ーさらーと。

さらさら

(副)

「一」砂など手に觸れたるやうの有様。

(又)ーさらーと。「二」砂の上など歩くやうなる音。(又)ーさらーと。

さらさら

(副)

拾遺「玉川にさいす手つくりさらーに昔

の人の戀しきやなぞ」「二」少しも。●絶え

さらめかす

(他動四段)

さらーとさする。

さらめく

(自動四段)

さらざらさする。

さらし

晒(名)

は晒したる白布。

さらしる

浚井(名)

井戸さらへ。●井戸替。

さらじゅ

娑羅樹(名)

娑羅双樹に同じ。

さらす

晒。曝(他動四段)

「一」雨風に當てて置く。

「二」水に附けて置く。

さらすは

(副)

れば。

然あらずは。●然らずんば。●でなけ

さむ

襪(自動下二段)

染色の變る。●變色する。●襪

さむ

色する。

さむ

覺。醒(自動下二段)

「一」眠の破る。●うへに

さむ

なる。「二」酔のなくなる。●正氣になる。

さむ

冷(自動下二段)

つめたくなる。

さん

産(名)

「一」出産。「二」産業。●財産。●產物。

さん

棧(名)

物に打ち付くる細長き木片。○「障子の

棧」「鍋蓋の棧」

さん

替(名)

文の一體。其物事又は人などを讀美するもの。

さん

散(名)

有位非官の稱へ。○「散三位」

さん

散(名)

粉藥。

さん

(名)

様の不丁寧なるもの。○「お竹さん」

さん

三。參(數)

みつ。

さん

譏(名)

譏言。

さん

斬(名)

刑罰の名。首を斬る事。●斬罪。

さんろ

山路(名)

山中の路。●やまち。

さんゐったい

三位一體(名)

神は單一なれども其中に父と子と靈との三位をなはれるをいふ。(基督教)

さんいち

三一(名)

三位一體の略。(基督教)

さんろん

三論(名)

百論、中論、十二門論、三種の經文。(佛教)

さんろんしゅう

三論宗(名)

佛教の一派。三論の教義を主とするもの。

さんむらう

三郎(名)

三番目の男の子。●三男。

さんろう

參籠(名)

祈願の爲め神社佛閣に籠る事。●おこもり。△(動)―參籠す。

さんば

産婆(名)

とりあげば。

さんば

三番(名)

さんばそうの略。

さんばい

參拜(名)

神社佛閣などに参りて拜する事。

さんばい

●參詣。△(動)―參拜す。

さんばい

三拜(名)

三度拜する事。拜禮の丁寧なるもの。

さんばい

三盃酢(名)

料理の詞。酢に醬油と味淋とを加へたるもの。

さんばい

算博士(名)

大學寮の官名。算道を教授するもの。

さんばい

三番叟(名)

「一」能樂にて翁に附屬したる舞曲の名。劍先の形したる烏帽子を被り黒色老翁の面を着け扇と鈴を持ちて舞ふもの。「二」芝居、踊などにて之に擬し演ずる一種の舞曲。「三」芝居にて之を最初に演ずる故○物事の最初の意。

さんばい

散髪(名)

切り散らしたる頭髮。●さんぎり。

さんばい

斬髪(名)

髪を刈る事。

さんばい

棧橋(名)

船の乗り下りの便利の爲め岸より水中に造り出したる橋。又は掛け渡したる板。

さんばい

水中に造り出したる橋。又は掛け渡したる板。

さんばい

板。

さんゐ 散位(名) 無官有位の稱へ。

さんによらい 三如来(名) 釋迦、藥師、阿彌陀。(佛教)

さんぽ 散步(名) ぶら／＼あるき。●遊歩。●運動。●

散策。△(動)―散步す。

さんぽん 三盆(名) 砂糖の一種。色白く最上等なるもの。

の。

さんぼん 三品(名) 親王位階の名。第三に位するもの。

さんぼう 參謀(名) 軍事に關して相談相手となる官

職。

さんぼう 三方(名) 神などに物を奉る器。角切の膳に

三方穴を明けたる足を附けたるもの。

さんぼう 三寶(名) 「一」佛、法、僧。「二」轉じて佛とい

ふに同じ。……(佛教)

さんぼう 算法(名) 「一」計算の方法。「二」算術。

さんぼう 譏謗(名) そしる事。△(動)―譏謗す。

さんぼう うじん 三寶荒神(名) 「一」天竺の神

の名。●荒神に同じ。「二」旅人の乗る馬の

稱へ。鞍の兩方へ巨燈檜の如きものを附け

中、左、右の三方に三人乗らるゝ仕組のもの。

さんぽう 散兵(名) 隊列をなさず所々に散らし置く

兵。

さんべい 殘兵(名) 戰死せずして残り居る兵士。

さんべいにまん 三平二滿(名) お多福の異名。額と鼻

と脣と平にして左右の頬滿ちたるの意。

さんど 三都(名) 三つの都府。東京、京都、大坂。●三

府。

さんど 山徒(名) 比叡山の僧徒。

さんどがさ 三度笠(名) 笠の一種。深く編みて旅人な

この被る菅笠。

さんどく 殘燈(名) 夜明けて後まで残る燈火。

さんち 三德(名) 智、仁、勇。

さんて 産地(名) 産出する土地。

さんてがさ 參朝(名) 朝廷に參る事。●參内。△(動)

―參朝す。

さんぢやう 散杖(名) 僧の用具。拂子の類。

さんちやう 山中(名) 山の中。●山間。

さんり 三里(名) 奚點にいふ詞。膝骨の下の間むさ、

ろ。

さんりやう 山陵(名) みささき。●御陵。

さんりく 三略(名) 支那にて黄石公の張良に授けたる

三種の兵法。すなはち上略、中略、下略。

さんめる

(形)

さりぬる。●過ぎし。●いにし。○「扱も去んぬる六日の夜」

さんあろう

殘鷺(名)

夏まで残りて鳴く鷺。

さんか

山河(名)

山と河さ。

さんか

山家(名)

やまが。●山里。

さんが

山河(名)

さんかに同じ。

さんが

參賀(名)

參内して拜賀する事。△(動)↓參賀す。

さんかい

山海(名)

山と海さ。

さんがい

三階(名)

二階の上に又一階ある家。●三層樓。

さんがい

三界(名)

想像上の三世界。一に慾界、二に色界、三に無色界。(佛教)

さんがいっしん

三界一心(句)

三界唯心に同じ。

さんがいま

三階松(名)

紋の名。枝を三段に畫がきたる松の形。

さんがいゆわしん

三界唯心(句)

三界も唯心によりて現出するの意。(佛教)

さんがいびし

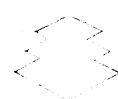
三階菱(名)

紋の名。菱を三段に重れたる形。(圖)

さんがにち

三箇日(名)

一月の一日二



日三日の稱。

さんかん

山間(名)

山のあひだ。●山中。

さんかん

三韓(名)

古代の國の名。今の朝鮮の地。「一」上古は馬韓、辨韓、辰韓。「二」後世は新羅、高麗、百濟。

さんかく

三角(名)

三つの角ある形。●三稜。

さんかく

山嶽(名)

山と嶽さ。●やまぐ。

さんかく

散樂(名)

式樂以外の音樂。●猿樂。

さんかく

産額(名)

産出する總額。

さんかく

三學(名)

佛教上三種の學問。一に戒、二に定、三に惠。

さんがく

殘額(名)

残り高。●殘の金額。

さんよ

參與(名)

「一」其事に與る事。△(動)↓參與す。

さんよ

「二」官名。

大政に參與する高官。維新後置かれて程なく廢せられたるもの。

さんよ

殘餘(名)

残りもの。●餘り物。

さんよ

算用(名)

數ふる事。●勘定。●計算。△(動)↓算用す。

さんようすうじ

算用數字(名)

洋算に用ふる數字。1 2 3 4の類。

さんたい

三諦(名)

一に空諦、二に色諦、三に心諦。(佛

教)

さんだい

三代(名) 「一」支那の上古の三時代。夏、殷、周。「二」三代集の略。

さんだい

参内(名) 内裏へ参上する事。△(動)―参内す。

さんだいがさ

参内傘(名) 公卿大名等の参内する時行列に持たする傘。●立傘。

さんだいしふり

三代集(名) 文徳、醍醐、村上、の三朝に成りたる勅撰の歌集。古今集、後撰集、拾遺集。

さんたん

讃嘆(名) 深く感じて讃むる事。●感嘆。△(動)―讃嘆す。

さんたん

算段(名) 種々の手段を盡す事。●工面。●工夫。△(動)―算段す。

さんれい

山霊(名) 其山を司る神。●山神。

さんそ

酸素(名) 化学上元素の一つ。動物の生活に最も必要なもの。

さんぞん

三尊(名) 中尊と左右の脇侍と三體の佛像。

さんそう

山僧(名) 「一」山寺の僧。「二」比叡山の僧。

さんさう

山莊(名) 山間の別莊。

さんざう

三藏(名) 「一」三種の教法。「二」經藏、「三」律藏、「三」に論藏。「二」また佛藏、菩薩藏、聲聞藏。「三」三藏の教法に通じたる僧の資格。○「立非三藏」

さんそう

譏奏(名) 他人を惡し様に主君に言ひなす事。△(動)―譏奏す。

さんざふらふり

左候(名) 左に候ふ。●左様で御坐ります。○謡曲「手に持ちたるは文にてあるや。さん候よ文にて候ふ」

さんぞく

山賊(名) 山中に隠れ居る賊。●やまぢち。

さんづ

三途(名) 「一」死者の行く三種の苦界。一に火途(地獄)二に血途(畜生)三に刀途(餓鬼)●三惡道。「二」三途に行く道にある川。●冥途の渡場の川。(佛教)

さんねつ

三熱(名) 蛇體の一日に三度づゝ受くる熱の苦しみ。(佛教)

さんねん

殘念(名) 「一」心殘のする事。●遺憾。「二」無念。……△(形)―殘念なる。(副)―殘念に。

さむらひ

侍(名) 「一」親王大臣以下高貴の人の家に勤番する家臣。「二」轉じて官人にても五位六位の人をいふ。「三」後又轉じて武家の家人。

●士。●武士。

さんらい

山嶺(名) 山より吹きおろす風。●山嵐。

さんらい

三禮(名) 三度拜禮する事。佛を拜むに用ふるもの。(佛教)

さむらいどころ

侍所(名) 侍の出仕して詰め居る役所。

さむらいまほし

侍烏帽子(名) 侍の素袍を着る時に用ふる烏帽子。横さびの折烏帽子とも云ふ。



(圖)

さむらに

(副) 寒く。●寒げに。(萬葉) 燦爛(副) きら／＼と。●きらめきて。(又)

さむら

燦爛と。(形) 燦爛たる。侍。候(自動四段) 「一」貴人の前に伺候する。●詰め居る。「二」御座ります。

さむら

侍。候(助動四段) さふらふ。●ます。○諸曲「二たび袖をぬらしさむらふ」

さん

三板(名) 兜の鍔の三枚目の板。

さんのいた

三鼓(名) 雅樂の樂器。一の鼓の類にて高麗樂に用ふるもの。一名くれのつみ。

さんわう

山王(名) 日吉神社に祭るさころの神。……

七社を見よ。

さんのく

三句(名) 和歌の第三の句。五文字のさころ。

さんのまる

三の丸(名) 城の郭内の稱へ。二の丸に次ぐさころ。

さんのけ

産氣(名) 子の生れんとする様子。

さんくわ

山花(名) 山中の花。●山の櫻。産科(名) 醫學の分科。出産、胎兒等を専らに研究するもの。

さんくわ

酸化(名) 化學上の詞。其物が空氣中の酸素に化合する事。●食物など腐敗して酸くなる事。△(動) 酸化す。

ざんくわ

殘花(名) 夏になりて咲き残り居る櫻。

ざんくわ

三槐(名) 三公の異名。

ざんくわ

參會(名) 參りて出逢ふ事。●寄り集まる事。△(動) 參會す。

ざんくわ

散會(名) 集會終りて歸り去る事。△(動) 散會す。

ざんくわ

三光(名) 日、月、星。三皇(名) 支那古代三人の天子。伏羲、神農、黃帝。

ざんくわ

三回忌(名) 三年目の法會。

さんく^{わクナうてナヨ}う

三光鳥(名) 鳥の名。囀に似て二

本の長き尾あるもの。其聲「つきはしひ」と

鳴くが如く聞ゆ。

さんぐわつ

三月(名) 年の第三番目の月。

さんぐわつじん

三月盡(名) 陰曆三月の晦。

さんく^ん

三關(名) 古代要害の場所として置かれたる

三の關所。伊勢の鈴鹿、美濃の不破、愛知。

さんく^ん

散官(名) 有位無官の稱。●非職。

さんく^ん

參觀(名) 参りて見物する事。△(動)―參觀

す。

さんぐわん

三管(名) 雅樂の樂器。横笛、篳篥、笙。

さんぐう

三宮(名) 太皇太后、皇太后、皇后。

さんぐう

三后(名) 三宮に同じ。

さんぐう

參宮(名) 伊勢太神宮に參詣する事。△(動)

―參宮す。

さんや

山野(名) 山と野原と。

さんやく

散藥(名) 粉藥。

さんまい

散米(名) 陰陽師、神官などの祓をする時に

撒き散らす白米。

さんまい

三昧(名) 心を定めて専ら行ふ事。○「法華

三昧」「念佛三昧」

さんまいだ^下う

三昧堂(名) 専ら佛道修行の爲めに籠る

堂。

さんまいかぶど

三枚兜(名) 兜の一種。三枚鍔に造り

たるもの。

さんまた

三胴(名) 竿の先に二胴の木を附けたるも

の。物干竿など上げ下ろしするに用ふ。

さむけ

寒氣(名) 病の爲に身に寒さを感じる事。●惡

寒。

さんけ

三家(名) 徳川將軍の一門三家。尾張、紀伊、水

戸の三大名。

さんけ

山下(名) 山の麓。

さんけ

散華(名) 佛事の時紙にて作りたる花を撒き散

らす事。

さんけ

懺悔(名) 過去の罪過を後悔する事。又は罪過

を明白に述べて後悔したる趣を佛前又は他

人の前に告ぐる事。(佛教)

さんけい

三景(名) 景色を以て有名なる日本三ヶ所の

地。陸前の松嶋、丹後の天の橋立、安藝の嚴

鳴。

さんけい

參詣(名) 神社佛閣に詣つる事。●參拜。△

(動)―參詣す。

さんげつ

殘月(名) 夜の明けたる空に残り居る月。

さんげん

三絃(名) 「一」雅樂の樂器。箏、和琴、琵琶。

「二」俗曲の樂器。三味線。

さんけん

讒言(名) 他人の事を惡し様にいひなす事。

●讒訴。●讒。△(動)―讒言す。

さんけし

(形。形狀言ク活) 寒しに同じ。

さんぶ

三府(名) 東京、京都、大坂。●三都。

さんぶ

産婦(名) 出産したる婦人。

さんぶつ

産物(名) 其土地より産出するもの。●名産

の品物。

さんぶつ

讚佛(名) 佛德を讚美する事。(佛教)

さんぶつ

殘物(名) 殘りの品物。

さんぶつじょう

讚佛乘(名) 佛經を讚美する事。

さんぶん

散文(名) 詩歌ならぬ文章の稱へ。

さんぶく

三伏(名) 夏至の後。第三の庚の日を初伏と

いひ。第四の庚の日を中伏と云ひ。立秋後

第一の庚の日を末伏と云ひ。此三つの庚の

日は金氣伏藏するさて三伏と名づく。暑さ

の最も甚しき時節ゆゑ夏の土用などと同じ

やうの意に用ふ。

さんぶく

山腹(名) 山の中程。●中腹。

さんぶくつる

三幅對(名) 「一」中と左右と三幅にて一

對となりたる掛物。「二」轉じて總べて三つ

にて一揃になるもの。

さんぶぎやぎょう

三奉行(名) 徳川時代、寺社奉行、勘

定奉行、町奉行の稱。

さんご

三鈷(名) 佛具の名。獨鈷、五鈷の種

類にて先の尖りの三本に分れた

るもの。(圖)

さんご

珊瑚(名) 海產動物の巢。木の枝の

形をなしたるものにて紅色と白色との二種

あり。其色の美きを以て珍重せらる。

さんご

産後(名) 子を産みたる後。

さんご

三五(數) 十五。十五歳。○「三五の春」

さんこう

三公(名) 太政大臣、左大臣、右大臣。

さんかう

三綱(名) 三種の人間の大道。すなはち君

臣、父子、夫婦。

さんかう

三更(名) 夜の子の刻。

さんかう

参向(名) 参りて其境所に向ふ事。○「勅使

参向」

参考(名) 其事と引合はせ考ふる事。●参照。

△(動)―参考す。



さんごのよ

三五夜(名) 十五夜。

さんごのつき

三五の月(名) 十五夜の月。

さんごのくれ

三五の暮(名) 十五夜の夕暮。

さんごのい

三國(名) 「一」支那の中世吳、魏、蜀の稱。
「二」我國にて古へ日本、唐土、天竺の稱。

さんごのく

殘酷(名) 殘忍酷薄なる事。●むごたらしき事。●殘虐。△(形)―殘酷なる。(副)―殘酷に。

さんごのちゅう

三五夜中(名) 十五夜の夜中。○謠曲「三五夜中の空にまた」

さんごのじゅ

珊瑚珠(名) 珊瑚にて造りたる珠。

さんえ

産衣(名) うぶぎ。

さんえ

蠶衣(名) 絹にて作れる袈裟。《佛教》

さんえ

三衣(名) 僧の着る衣の稱へ。即ち一に僧伽梨、(大衣)二に鬱多羅僧(七條)三に安陀會(五條)の三。

さんゑ

産穢(名) 出産の穢れ。昔は産婦三十五日父七日間之を忌みて神拜なごせざりしもの。

さんゑ

三會(名) 龍華三會を見よ。

さんてん

山顛(名) 山のいたゞき。

さんあくたう

三惡道(名) 三種の苦界。一に餓鬼道、

さんざさ

寒(名) 寒氣。

さんざ

參座(名) 參りて座する。●參上。

さんざい

散齋(名) 神祭に携はる人の前以て一ヶ月間行ふ潔齋法。●あらいみ。

さんざい

散財(名) 金錢を遣ひ散らす事。●費消。△(動)―散財す。

さんざい

斬罪(名) 刑罪の名。首を斬る事。●斬首。●斬。

さんざがり

三下(名) 三味線の調子の名。三の糸を下げて弾くもの。

さんざん

散散(副) 甚しく。●ひごく。●思ふ儘に。(又)―散々に。

さんざんぐ

三三九度(名) 婚禮の時行ふ盆事の稱へ。嫁より始めて三度、簀より始めて三度、嫁より始めて三度遣り取りするもの。

さんざん

散策(名) 散步。

さんざん

山氣(名) 深山の空氣。

さんざん

算木(名) 卜筮の具。四五分角高寸の木の中央に刻み目を付けたる者。之を三本づゝ並べ三(乾)三(坤)などいふ形にして占をなす。

さんぎ

參議(名) 官名。太政官に屬し大臣の列座に參

して大政を議定執行するの役。●おほまつりことびさ。

さんぎ

慙愧(名) はづかしく思ふ事。

さんぎり

(名) 散髮。

さんき

山居(名) 山中の住居。

さんきやキヨウ

三卿(名) 徳川時代。田安、一橋、清水の三卿を呼びたる稱へ。

さんげキヨ

産業(名) 「一」渡世。●生業。「二」品物を造り出す業務。●實業。

さんげキヨ

蠶業(名) 養蠶に關する業務。

さんきキヨ

三極(名) 天、地、人。

さんきキヨ

三曲(名) 琴、三味線、胡弓。

さんきん

參勤(名) 徳川時代。大名の順番に江戸に詣

むる事。

さんきん

殘金(名) 殘りの金。

さんきんかうたい

參勤交代(名) 徳川時代。諸大名の交代して參勤する事。

さんきく

殘菊(名) 冬になりて咲き残り居る菊。

さんきく

殘虐(名) 殘忍惡虐なる事。●むごたらしき事。●殘酷。△(形)―殘虐なる。(副)―殘

虐に。

さんぬミ

三位(名) 位階の名。第三に位するもの。

さんみヤミョウ

三明(名) 一に宿住智證明(前際の惡を治むるもの) 二に死生智證明(後際の惡を治むるもの) 三に漏盡智證明(中際の惡を治むるもの)(佛教)

三密(名) 一に身密、二に語密、三に意密。(佛教)

さんみつ

三密(名) 一に身密、二に語密、三に意密。(佛教)

さんみく

山脈(名) 山の連續して同一の方向に走るもの。○「東北山脈」「四國山脈」

さんみくさんぼたい

三藐三菩提(名) あのかたらし三藐三菩提を見よ。

さむし

寒(形。形狀言ク活) 温度の低くして身のふるふ程に感ずる有様。●つめたし。

さむし

(形。形狀言シク活) さびしに同じ。

さんし

三史(名) 支那古代の三歴史。史記、漢書、後漢書。

さんじ

山寺(名) やまでら。

さんじ

三時(名) 正午より第三番目の時刻。午夜より第三番目の時刻。

さんじ

暫時(副)(名) しばらく。●しばし。●少しの

さんじ

暫時(副)(名) しばらく。●しばし。●少しの

問。

さむしろ

小薤(名) 薤に同じ。

さんし

殘暑(名) 夏の土用明け後の暑氣。

さんせ

山椒(名) 木の名。葉は藤に似て小さく、葉、枝、幹とも刺ありて香氣高く實は丸く小さくして熟すれば辛く食用となるもの。

さんせ

參照(名) 照らし合はす事。●參考。△(動) — 參照す。

さんじ

山上(名) 山の上。

さんじ

散狀(名) 廻狀に同じ。(東鑑)

さんじ

參上(名) 貴人の御前に参り上る事。△(動) — 參上す。

さんせ

殘照(名) 入日の後に殘る反射の光り。

さんせ

山椒魚(名) 兩棲動物の名。形蜴蜥に似て腹赤く我國にては箱根山中の湖水などに棲むもの。古來小兒の虫の藥さす。

さんし

蠶食(名) 蠶の桑を食ふ如く國土などじりじりさ漸々奪ひ取る事。△(動) — 蠶食す。

さんし

蠶室(名) 養蠶の室。●かいこべや。

さんじん

三身(名) 佛の三種の變身。一に法身、二に報身、三に應身。(佛教)

さんしん

謏臣(名) 他人を謏言する臣。

さんしん

斬新 極めて新らしき事。(形) — 斬新なる。

さんし

三車(名) みつのくるまを見よ。(佛教)

さんじき

棧敷(名) さじきに同じ。

さんし

散手(名) 散手破陣樂の略。

さんし

斬首(名) 刑罰にて首を斬る事。△(動) — 斬首す。

さんし

散手破陣樂(名) 雅樂の曲名。

さんし

產出(名) 產物として造り出す事。△(動) — 產出す。

さんじ

算術(名) 數學の科。量を計算研究するの術。

さんし

三春(名) 春三箇月。すなはち陰曆正月二月三月。

さんじ

三旬(名) 三十日間。

さんし

殘春(名) 花など散りて後春の日數のみ残り居る時。

さんし

三秋(名) 秋三箇月すなはち陰曆七月八月九月。

さんじ

三從(名) 女子に要する三箇條の教。家にあ

さんじ

りては父に従ひ、嫁しては夫に従ひ、夫死し

ては子に従ふの三則。

さんじ シユ、ふ

三十。卅(數) 十の三倍。みそ。

ざんし シユ、ウ

殘秋(名) 紅葉など散りて後秋の日數のみ残り居る時。

さんじ シユ、ふ ばんじん

三十番神(名) 一月三十日を分

擔して法華經を守護するま云ふ神。すなはち熱田、諏訪、廣田、氣比、氣多、鹿島、北野、江文、貴船、天照皇大神、八幡、加茂、松尾、大原、春日、平野、大比叡、小比叡、聖眞子、客人、八王寺、稻荷、住吉、祇園、赤山、健部、三上、兵主、菟鹿、吉備の諸神。法華宗にて之を祭る。

さんじ シユ、ふ にさう

三十二相(名) 釋迦の具したる三

十二の相好。一に足安平相、二に千幅輪相、三に手指纖長相、四に手足柔輭相、五に手足縵網相、六に足跟滿足相、七に足趺高好相、八に臍如鹿王相、九に手過膝相、十に馬陰藏相、十一に身縱廣相、十二に毛孔生青色相、十三に身毛上靡相、十四に身金色相、十五に身光面各一丈相、十六に皮膚細滑相、十七に七處平滿相、十八に兩腋滿相、十九に身如師

さんじ シユ、ふ さんばん

三十三番(名)

我國にて佛教信

子相、二十に身端直相、二十一に肩圓滿相、二十二に四十齒相、二十四に四牙白淨相、二十三に齒白齋齒相、二十五に頰車如師子相、二十六に咽中津液得上味相、二十七に廣長舌相、二十八、梵音深遠相、二十九に眼色如金精相、三十に眼睫如牛王相、三十一に眉間白毫相、三十二に頂肉髻成相。(佛教)
徒の巡拜する三十三所の觀音。即ち一に紀伊の國那智山、二に同紀三井寺、三に同粉河寺、四に和泉の國橿尾寺、五に河内の國藤井寺、六に大和の國壺坂寺、七に同岡寺、八に同長谷寺、九に同南圓堂、十に山城の國三室戸、十一に同上醍醐寺、十二に近江の國岩間寺、十三に同石山寺、十四に同三井寺、十五に京都今熊野、十六に山城の國京都清水、十七に同六波羅寺、十八に同六角堂、十九に同草堂、二十に山城の國良峰、二十一に丹波の國穴生寺、二十二に攝津の國總持寺、二十三に同勝尾寺、二十四に同中山寺、二十五に播磨の國清水、二十六に同法華寺、二十七に同

書寫寺、二十八に丹後の國成合、二十九に同
松岸寺、三十に近江の國竹生島、三十一に同
長命寺、三十二に同觀音寺、三十三に美濃の
國谷汲。

さんじ ふっさんてん

三十三天(名) 須彌山の上にあ
る三十三等の天界。

さんじ ふっさんじん

三十三身(名) 三十三體に化現
する佛の變身。即ち一に佛身、二に辟支佛、
三に聲聞、四に梵王身、五に帝釋身、六に自
在天身、七に大自在天身、八に天大將軍身、
九に毘沙門身、十に小王身、十一に長者身、
十二に居士身、十三に宰官身、十四に婆羅
門身、十五に比丘身、十六に比丘尼身、十七
に優婆塞、十八に曇婆夷、十九に長者、居士、
宰官、婆羅門、婦女身、二十に童男、二十一に
童女、二十二に天、二十三に龍、二十四に夜
叉、二十五に乾闥婆、二十六に阿修羅、二十
七に迦樓羅、二十八に緊那羅、二十九に摩睺
羅伽、三十に人、三十一に非人、三十二に執
金剛神、三十三に觀世音。(佛教)

さんしめ のじんぎ

三種の神器(名) 我國にて帝位と共に

さんび

授受し給ふ三つの至尊貴重なる寶。八咫の
鏡、草薙の劔、八咫瓊の曲玉。

さんびか

讚美(名) 「一」神佛の徳などほめたいふる事。
△(動)―讚美す。「二」讚美歌の略。

さんびつ

讚美歌(名) 神徳を讚美して會堂などに歌
ふ一種の歌曲。(基督教)

さんびつ

算筆(名) 算盤と物書く事と。

さんもん

三筆(名) 我國にて古代有名なる三人の筆
蹟。嵯峨天皇、空海、橘逸勢。

さんぜ

山門(名) 「一」寺の總門。「二」轉じては比叡
山延曆寺の異名。

さんせい

三世(名) 過去、現世、未來の三世界。(佛教)

さんせい

參政(名) 政事に參與する事。又は其職。

さんせい

賛成(名) 其人の意見を可とする事。●同意。

さんぜさう

△(動)―賛成す。

さんせい

殘星(名) 夜の明けたる空に残りて見ゆる
星。

さんせい

三世相(名) 佛説の前世來世を基とし五
行、陰陽、人相、手相等の説を利用して生年
月等に據り人の禍福、吉凶を説くもの。又は
之を記載したる書物。

さんせつ

残雪(名) 消え残りたる雪。

さんせん

山川(名) 山と川と。

さんぜん

潸然(副) 涕を流して泣く有様。●さめぐさ。(又)―潸然と。

ざんぜん

嶄然(副) 外のものよりは一段高く抜け出てたる有様。(又)―嶄然と。

さんぜんせかい

三千世界(名) 佛教にて云ふ有らゆる世界の總稱。大千世界を三つ合はせたるもの。……大千世界を見よ。

さんせき

三蹟(名) 我國にて古來有名なる三人の筆蹟。藤原行成、藤原佐理、小野道風。

さんせき

三夕(名) 秋の夕暮をよみたる三人の名高き和歌。寂蓮「さびしさは其色さしもなかりけり横立つ山の秋の夕暮」西行「心なき身にもあはれば知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮」定家「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」

さんす

産(自動サ變) うまゐる。

さんす

産(他動サ變) 作り出す。

さんす

賛(他動サ變) 賛成する。●助力する。

さんす

讚(他動サ變) 讚美する。●賞讚する。●はむ

さんす

算(他動サ變) 計算する。●數ふる。

さんす

散(自動サ變) 散らばる。●散る。

さんす

散(他動サ變) 散らす。

さんす

參(自動サ變) 參上する。●まゐる。

さんす

譏(他動サ變) 譏言する。

さんすゐ

山水(名) 「一」山と水との景色。「二」山と水との景色を書きたる畫。「三」村上天皇御物の琴の名。

さんずゐ

三水(名) 漢字の偏の名。河、江、海等の左の部分。

さんすはちんらく

散手破陣樂(名) さんしはちんらくに同じ。

さう

左右(名) ひだりさみぎと。

さふり

障(他動下二段) さいふる。●止むる。●防ぐ。●塞ぐ。

さのまひ

左舞(名) 左方の舞樂。

さく

爵(名) しやくに同じ。(雅)

さく

幘(名) 白き絹にて巾子を結びたる冠の櫛へ。天皇御神事の時に着し給ふもの。

さく

索(名) 不動明王の左手に持つ繩。惡魔を縛する

ためのもの。(佛敎)

櫛(名)

「一」木の杭を打ち並べて作れる垣。「二」櫛を結びて敵を防ぐところ。●砦。

笏(名)

しやくに同じ。(雅)

策畧(名)

策畧。●手段。●謀計。

朔(名)

ついたち。●一日。

昨(名)

昨日。●昨夜。●昨年。

作(名)

「一」作る事。又作りたるもの。「二」田畑に野菜穀物を作る事。又は作りたるもの。

遮(自動下二段)

よける。

放(他動下二段)

放す。●解く。○萬葉「かくのみやあが戀ひ居らむねば玉の夜の紐だにさきさけすして」

放(自動下二段)

心を遣る。●氣を晴らす。○萬葉「語りさけ見さくる人目さもしみさ」

裂(自動下二段)

切れて二つになる。

裂(自動四段)

切れて二つにする。

啖(自動四段)

「一」花の開く。「二」波の立つ。○萬葉「あちかまの瀉にさく波」

下(他動下二段)

下にやる。●くだす。●おろす。●低くする。

提(他動下二段)

手に垂らして持つ。

座具(名)

僧家にて行または讀經などする時に敷く物。

作意(名)

著作製作の意匠。

榮井(名)

井の美稱。(祝詞式)

索引(名)

さぐりびき。●見出し。

石榴(名)

木の名。葉は鮮綠色にして幹は滑らかに。夏の初め緋色の花咲き秋に至り皮の中に赤き粒を持ちたる實を結ぶもの。

柘榴彈(名)

彈丸の一種。石榴の實の如く小さき粒を集めたる彈丸。敵の頭上に碎け散るやうに作れるもの。●榴散彈。

ざくろたま

尺八(名) しやくばちに同じ。(雅)

さくはち

咲花の(枕) うつろふの枕詞。(萬葉)

さくばな

朔望(名) 朔日と十五日と。

さくばう

笏拍子(名) しやくびやうしに同じ。

さくばう

索餅(名) むぎなはに同じ。

さくばう

(副) 水を物に入るゝ様の音。●さんぶりさ。

さくばう

(名) 笠懸、犬追物などの騎射の式に犬馬などの足跡をいふ詞。

さくばう

(名) 「一」しやくくり。●ざくくり。「二」さくり

あぐる

あぐる事。○字治「さぐりもよくさ泣く」
探(名) 「一」弓弦の名所。矢筈のわいる部分。

あぐりあぐ

「二」醫術の具。瘡傷の内部を探るもの。
(他動下二段) しやくりあげる。●すすり
なます。

あぐる

探(他動四段) さがす。●求むる。●尋ねる。

●探偵する。

あぐらん
あぐらん

左官(名) 壁塗を業とする人。●壁屋。
(名) 古代の官名。其役所の書記役。……役所
によりて文字を異にする事左の如し。

史。……
〔神祇官〕のさくわん。
〔太政官〕のさくわん。

録。……
省のさくわん。

屬。……
職、寮のさくわん。

令史。……
司、署のさくわん。

疏。……
臺のさくわん。

主典。……
使のさくわん。

志。……
〔檢非違使〕のさくわん。
〔左右衛門府〕のさくわん。

目。……
地方官のさくわん。

典。……
大宰府のさくわん。

あぐれ

作例(名) 文章和歌などの手本を爲る例證。

さくなたり

●先例を示したる古文古歌。

(副) 川水の瀧となりて奔り落つる有
様。○祝詞式「高山の末短山の末よりさく
なりに落瀧つ早川の瀨にます瀬織津姫とい
ふ神」

さくなん

石楠草(名) しやくなけに同じ。(和名抄)

さくなげ

石楠花(名) 草の名。しやくなけに同じ。

さくら

櫻(名) 「一」木の名。花は五瓣にして白、薄紅、
八重、一重等種類多く何れも春の半より末
にかけて咲く。我國特有の花にて古來之を
賞翫して作れる詩歌數へも盡されず。「二」
かね 重の色目の名。表白、裏濃蘇枋。「三」色の
名。薄紅。

さくらいろ

櫻色(名) 櫻の花の如き色。●薄紅。●淡
紅色。

さくらい

櫻魚(名) さくらうをに同じ。

さくらばな

櫻花(名) 櫻の花。

さくらばな

櫻花(枕) 榮は少女の枕詞。花の如く榮ゆ
るの意。(萬葉)

さくらづ

櫻戸(名) 「一」櫻の木の材にて作れる戸。

「二」櫻の花の咲きたる門。……山里に云ふ。

櫻麻(名)

さくらあさに同じ。

櫻貝(名)

貝の名。殻の櫻色なるもの。

櫻狩(名)

〔一〕櫻の花の咲く頃する鷹狩。

〔二〕花見。

櫻鯛(名)

櫻の花の咲く頃捕る鯛。最も

其風味を賞翫す。

櫻草(名)

草の名。葉は茶の葉に似て櫻に

似たる紅の花咲くもの。

櫻月(名)

陰曆三月の異名。

錯亂(名)

入り交り亂る事。△(動)―錯亂

す。

櫻結(名)

紐の結び方の

名。〔圖〕

櫻魚(名)

〔一〕櫻の盛の頃

のぼる小鮎。

〔二〕魚の名。わかさぎの一名。

櫻草(名)

さくらさうに同じ。

麻に同じ。

◎一説には櫻の咲く頃種を蒔く故

の名。又一説には櫻は地名なるべし。

(萬

葉)

櫻雨(名)

櫻の花盛りの頃降る雨。

櫻湯(名)

鹽漬の櫻に沸湯を注ぎて飲むも

の。

さくらびど

櫻人(名)

〔一〕櫻は地名。其土地の人。(催

馬樂)

〔二〕催馬樂の曲名。

さくらもち

櫻餅(名)

食品の名。櫻の葉に包みたる餡

餅。

さくらずみ

佐倉炭(名)

木炭の一種。下總國佐倉の名

産。

さくむ

(他動四段)

凸凹のある處を踏みて行く。●岩

なごの上を行く。(萬葉)

さくのなは

索繩(名)

索を見よ。

さくむ

(他動四段)

さくむに同じ。(萬葉)

さくぶん

作文(名)

稽古の爲に文章を作る事。又は其

作りたる文。

さくこん

昨今(名)

昨日今日。●近頃。●此頃。●近

來。

さくてん

釋奠(名)

しゃくてんに同じ。

さくさく

(副)

さくさに同じ。(又)―さく／＼さ。

さくさめのおじ

(名)

老女。●姑。

さくじ

作事(名)

普請。●建築。●工事。

さくじ

三狐神(名)

田の神として農家にて祭るもの。

さくじ

(自動四段)

こましゃくれる。●差出がまし

き事をする。(雅)

きふじ

昨日(名) きのふ。●前日。

きふし

作者(名) 文章、詩、歌を作る人。又は作りたる人。●著者。

きふ

鞘(名) 又物の又を入るゝ木製の袋。

きふ

莢(名) 豆の類の實を被ふ殻。

きふ

紗綾(名) 織物の名。綾に似て種々の模様あるもの。

きふ

鞘走(自動四段) 及が自然と刀の鞘を脱け出づる。

きふ

(副) 「一」きふに同じ。「二」きふと音して。(雅)

きふ

障(自動四段) さはるに同じ。

きふ

明なる事。●はつきりしたる事。(形)―と

きふ

やゝなる。(副)―とやゝに。

きふ

(自動四段) 「一」騒ぐ。「二」さゝと鳴る。(形。形状言ク活) さやいである。

きふ

(副) 征の葉などの風に鳴る音。●絹地などの磨れ合ふ様なる音。(又)―とやゝと。

きふ

(自動四段) さやと音のする。(雅)

きふ

鞘師(名) 鞘を造る工人。

きふ

左馬(名) 左馬寮の略。

さま

様(名) 「一」有様。●様子。●模様。「二」其様子。

さま

●其方角。「三」他の名詞の下に置きて尊稱とする詞。○「神様」「佛様」「お月様」「天子様」

さま

様(代) 尊稱を示す代名詞。○「様か来る夜は」

さま

左馬寮(名) 官廳の名。右馬寮と並び立ち

さま

て天皇の御馬一切の事を掌るところ。官吏は頭(權頭あり)助、允、屬あり。

さま

(自動四段) 「一」漂ふ。●漂泊する。●あちこちぶらと行く。「二」憂ひ叫ぶ。●呻吟する。

さま

妨(他動下二段) 邪竄をする。●妨害する。(副) 左様にまで。●それほどに。

さま

様様(副) くさぐさ。●いろ／＼。●種々。(又)―様々に。(形)―様々の。

さま

覺。醒。冷。醒(他動四段) さめさする。

さま

鮭(名) 魚の名。河近き海又は海近き河に住む大なる魚。多くは東北の産にて常に鹽引さし食用に供せらるゝもの。

さま

酒(名) 「一」酔ひて快を取る飲物の總名。「二」特

さけ

には日本酒。米にて醸したるもの。
ものいけに同じ。○源氏「例の御さけ

さけいて

の久しく起らせ給はざりつるを」
左京兆(名) 左京職の異名。

さけちう

提重(名) 重箱の一種。手に提ぐるやうに作れるもの。

さげな

下緒(名) 刀の鞘に附くる打紐。

さげなたう

酒飲(名) 催馬樂の曲名。

さげおび

下帶(名) 大刀に附けたる紐。

さげがみ

下紙(名) 文書に張り付けて下げ置く紙札。

●附札。●附箋。

さげがみ

下髪(名) 徳川時代に行はれたる貴婦人の

髪。結びて末を長く垂らしたるもの。

さげなほし

下直衣(名) 引直衣を見よ。

さげのつかさ

造酒司(名) みきのつかさに同じ。

さげのみ

酒飲(名) 好みて酒を飲む人。●上月。

さげぶ

叫(自動四段) 大聲を上ぐる。●なる。

さげふた

下札(名) 「一」下紙。●附箋。「二」地券。

さげごし

下輿(名) 腰にて昇く輿。●腰輿。●たごし。

さげあま

下尼(名) 髪を切つたるのみにて剃髪せぬ尼。(夫木)

さけめ

裂目(名) 裂けたる所。

さけしむ

(他動四段) さげすむに同じ。

さげすむ

(他動四段) あなごる。●見下ぐる。●輕蔑する。

さふ

左府(名) 左大臣の異名。

さぶ

鏑(自動上二段) 金麴に鏑の出来る。

さぶ

(自動上二段) 「一」さぶ。●進む。「二」其物ら

さぶ

しくなる。●めく。「三」古くなる。●古く

さぶらう

なりて威嚴の付く。……(雅)

さぶら

三郎(名) さむらうに同じ。●三男。

さぶら

座蒲團(名) 座する時に敷く小蒲團。

さぶら

座振舞(名) 座上の響應。

さぶら

侍(名) さむらひに同じ。

さぶら

侍(自動四段) さむらふに同じ。

さぶら

(形 形状言シク活) さむしに同じ。

さぶら

雑魚(名) 種々入り交りた小魚。

さぶら

狭衣(名) 衣に同じ。(歌詞)

さぶら

狭衣の(枕) 小筑波の枕詞。衣の緒さか

さぶら

る意。(萬葉)

さぶら

雑魚場(名) 魚市場。●魚河岸。

さぶら

(副) さでに同じ。

ろくね

雜魚寝(名) 多人打雜りて寝る事。

ろくしん

左近(名) 左近衛の略。

ろくしん

左近櫻(名) 禁内紫宸殿の御階の下の左手に植ゐたる櫻。

ろくしん

左近衛(名) 左近衛府の略。

ろくしん

左近衛府(名) 近衛府を見よ。

ろくしん

鎖港(名) 港を鎖して外國人の來るを謝絶する事。

ろくしん

麝香(名) じゃかうに同じ。

ろくしん

鎖國(名) 國を鎖して外交を謝絶する事。

ろくしん

雜穀(名) さつこくの略。

ろくしん

珊瑚珠(名) さんごじゆの略。

ろくしん

(後) (一)物のある上に物の添はる時に云ふ詞。●まで。○古今「春雨にはほへる色もあひなくに香さへなつかし山吹の花」(二)だけ。●だけでも。○「今日さへ降らずは」

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

才(一) (一)學才。●文才。●學問。(二)藝。…

ろくしん

轉(自動四段) (一)小鳥の短き聲にて續け鳴く。(二)小鳥の如き聲にて意味の分らぬ事を語る。…外國人または海士などの物言ひに云ふ。(三)しゃべる。

ろくしん

道祖(名) 道を守る神の名。

ろくしん

河河(形、形狀言シク活) 河へたる有様。

ろくしん

才才(形、形狀言シク活) 學才文才のある有様。(雅)

ろくしん

河河(自動下二段) 甚しく河ゆる。

ろくしん

遮(他動四段) 横斷りて支へ止むる。●隔つる。●遮斷する。

ろくしん

左衛門(名) 左衛門府の略。

ろくしん

左衛門府(名) 衛門府を見よ。

ろくしん

後。(一)さうして。●そこで。●左様ありての始に置く詞。○「授今日は」

ろくしん

小魚をすくふ網。木竹などを曲けて網を張り柄を附けたるもの。(圖)

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく

ろくしん

扱置(他動四段) 其儘に置く。●先づ差し置く。○新續古今「たぐひなく



つれなき人はさておきて生ける我身の恨めしきかな」

さては (副)

それならば。●然らば。

さては (接)

および。●又。○源氏「中宮弘徽殿の女御此宮の女御左大臣の女御などさぶらひ給ふ。さては中納言宰相の娘二人ばかりぞさぶらひ給ひける」

さてんきキョウう

左典厩(名) 左馬頭の異名。

さての (形)

其外の。●又の。●其次の。○源氏「さての人々」元真集「さての朝」

さてゐて

(感) あいなごに似て力の強き詞。○「さてゐて面白事かな」

さてち

(感) さて〜に同じ。

さてみち

(感) さて〜に同じ。

さてみち

(副) いま。●どれ。(俗)

さてみち

笹。篠(名) 「一」竹の葉。●竹。「二」神樂歌の曲名。「三」酒の異名。

さてみち

(形) 小さき。●細き。○「さい水」

さてみち

些細(名) 少しばかり。●僅。△(形)―些細の。

さてみち

(名) 鷗の羽にて造りたる矢の羽。

さてみち

(副) 水の流るゝ音。●水の物にゝる音。

さざりんだう

笹龍膽(名) 竹の名。三

枚の笹の葉に龍膽の花を取り合はせたるもの。……源氏の紋の類。(圖)



さざはら

(自動四段) 支へらるゝ。●差支の出来る。

さざはら

笹原(名) 笹の生ひ茂りたるところ。

さざがに

笹蟹(名) 蜘蛛の異名。

さざがき

笹垣(名) 生にたるまゝの竹の垣。

さざたけ

笹竹(名) 竹に同じ。(續古今)

さざれ

礫(名) さざれいしに同じ。

さざれいし

礫石(名) 小さき石。●小石。

さざれなみ

(名) さざなみに同じ。

さざれみつ

(名) 小さく流るゝ水。

さざれし

(名) さざれいしの略。(歌訓)

さざなみ

笹波(名) 「一」近江の琵琶湖近傍の地の言。○千載「さい波や志賀の都は荒れにしな昔ながらの出樹かな」「二」神樂歌の曲名。

さざなみ

小波。波(名) 小さき波。●そよ吹く風に立つ

さざなみ

波。……近江の地名は清音にさざなみと稱

さざなみ

へ是は濁音にてさざなみと唱ふる事を注意

さざなみ

せよ。

やぶら

簾(名) 「一」一尺ほどの長さの丸竹に刻み目を附け又同じ長さの竹の先を細かく割りて舞

やぶら

を舞ふ人の手に持つもの。刻み目のある方を左にし割りたる方を右にして摩り合はせ

やぶら

音を立つるなり。「二」びんさいらの略。

やぶら

(名) 小さき萩。(雅)

やぶら

(名) さいなみに同じ。

やぶら

(自動四段) さら／＼と音のして水の流る。

やぶら

い。(更級)

やぶら

簾江男(名) 月の異名。(萬葉)

やぶら

山茶花(名) 木の名。椿に似て葉小さく花美

やぶら

しく秋の末より冬にかけて咲くもの。

やぶら

(名) 足利時代の謡物に添へたる聲。

やぶら

笹筵(名) 笹を折り敷きて筵に代用する

やぶら

事。(夫木)

やぶら

笹生(名) 笹原に同じ。

やぶら

支(他動下二段) つっぱり留める。●遮り留め

やぶら

る。●持ちこたへる。

やぶら

笹屋(名) さいやに同じ。

やぶら

笹丸(名) 紋の名。笹葉を丸く畫がきたる

やぶら

もの。

やぶら

捧(他動下二段) 「一」兩手にて差しあげて持

やぶら

つ。(二)奉る。●献上する。

やぶら

小栗(名) 栗の一種。○實の小さきもの。●

やぶら

芝栗。

やぶら

笹屋(名) 笹などにて假初に葺き圍ひたる小

やぶら

屋。山里の形容などに云ふ。

やぶら

小さき事。●些細。●僅。(形)―さいやか

やぶら

なる。(副)―さいやかに。

やぶら

(自動四段) さいめこさかする。●密談をす

やぶら

る。●私語する。

やぶら

(名) 小さき人。●小がらの人。(紫日記)

やぶら

笹枕(名) 笹を枕にして寝る事。山住野宿

やぶら

などの形容に云ふ。○續拾遺「露結ぶ野原

やぶら

の庵の笹枕幾夜か月の影にならん」

やぶら

大角豆(名) 豆の一種。小豆に似て莢も粒も大

やぶら

なるもの。

やぶら

棒物(名) 献上物。●供物。

やぶら

笹船(名) 笹の葉にて造りたる舟。小兒の戯

やぶら

に造りて池などに浮ぶるもの。

ろくろ

榮螺(名) 螺の類にて殻短く厚く太き刺あるもの。肉は食用す。

ろくろ

支言(名) 譏言。

ろくろ

鷓鴣(名) みそさいの古名。

ろくろ

佐々木折(名) 折烏帽子の一種。



ろくろ

小小妻(名) 草の名。庭に荒み又は簑に造るもの。○千載「さいめ刈る荒田の澤に立つ民も身のためにこそ袖もぬるらめ」

ろくろ

さわ／＼と音を立つる。(雅)

ろくろ

さいやくに同じ。

ろくろ

騒ぎ合ふ。●罵り騒ぐ。(雅)

ろくろ

内密にする談話。●ないしよばなし。●ひそ／＼ばなし。

ろくろ

さいめい(源氏)

ろくろ

小水(名) 小流れの水。

ろくろ

小小妻(名) 小小妻にて作れる装。

ろくろ

崎(名) 「一」山の突き出でたる鼻。「二」みさきに同じ。

ろくろ

幸(名) まことに同じ。●幸福。

ろくろ

先(名) 「一」前。「二」末。「三」以前。●過去。「四」

ろくろ

向ふ。「五」先方。

ろくろ

鷺(名) 鳥の名。鶴に似て小さく小魚などを食するもの。

ろくろ

詐欺(名) 詐り欺く事。●かたり。△(動)―詐欺す。

ろくろ

裂羽織(名) ぶっさき羽織に同じ。

ろくろ

先拂(名) 貴人他行の時先に立ちて道を拂ひ行く事。又は其人。

ろくろ

先箱(名) 徳川時代。大名の行列に其格式によりて徒士の先に挾箱を持たする事。

ろくろ

異。先(副) 其時より前に。●以前に。

ろくろ

先棒(名) 駕籠など昇く時前の棒を昇く方の人。

ろくろ

先供(名) 貴人他行の時先に立ち行く供人。

ろくろ

喧散(自動四段) 咲きて散る。●散る。○萬葉「秋萩の咲き散る野邊の夕露にぬれつゝ來ませ夜は更けるさも」

ろくろ

左義長(三槌打名) 「一」古は正月に用ひたる槌打を焼き上ぐるの式。「二」後世は正月の門松飾りを焼き捨つるの式。

ろくろ

袂霧(名) 霧に同じ。

きんをさつひひ

先一昨日(名) さきをさつひに同じ。

きんをさつひひ

先一昨日(名) 一昨日の前の日。

きんはひ

幸(名) さいはひに同じ。

きんはひ

幸(自動四段) おのづから幸福を得る。●幸福の結果に遇ふ。

きんはふ

幸(他動下二段) 幸福を授くる。●冥護を與ふる。

きんはふ

咲分(名) 一株の草木に種々の花咲く事。

きんはふ

先方(名) せんはうに同じ。

きんはふ

先置。魁(名) 「一」第一番に敵陣に入込む事。

きんはふ

●一番乗。●先登。「二」轉じて總べて第一にする事。●人に先んずる事。

きんはふ

左京(名) 「一」平安京を二區に別ちたる朱雀大路より東部の稱。「二」左京職の略。

きんはふ

坐興(名) 其席にて興ふる興味。●一座の慰み。

きんはふ

左京職(名) 左京を管轄する役所。官吏は大夫亮、進、(大、少)屬(大、少)、坊令あり。

きんはふ

先立(名) 先に立つ事。●第一番。●先導。

きんはふ

先立(自動四段) 「一」先に立つ。●先に行く。

きんはふ

●先に死ぬる。「二」前になる。●以前に行

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

先立(他動下二段) 先に立たす。●先に遣ふ。

きんはふ

幸魂(名) 幸福を授くる神靈。●冥護を與ふる神の御靈。

きんはふ

先備(名) 先手の備へ。●先陣。●先鋒。

きんはふ

先(自動四段) さいなむに同じ。

きんはふ

松「筆のさきらいさかし」(「二」口おき。

きんはふ

●舌の先。○源氏「ゆたけさきさきをいさ心して言ひつけ」

きんはふ

左金吾(名) 左衛門督の異名。

きんはふ

先(自動サ變) 先にする。●先に立つ。●魁をなす。

きんはふ

先乘(名) 貴人他行の時騎馬にて行列の先に立ち供する事。又は其人。●前驅。

きんはふ

前世(名) 過去の世界。●ぜんぞ。

きんはふ

先の松(名) 先供の持ち行く松明。(源氏)

きんはふ

(副) 幸福に。●無事に。●壯健に。

きんはふ

三枝(名) 三つ枝の出で、花咲く草。……百

きんはふ

合ならんかとの説もあれど詳ならず。

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

きんはふ

さんざん

三枝の(枕) 三つの枕詞。○古今序「此殿は

うへも富みけりさき草の三つば四つばに殿造りせり」

さんざん

三枝祭(名) 四月にある大和率川神社

の祭禮。此日三枝の花を取りて神前の酒樽を裝飾す。

さんざん

先頭(副) 先達。●先日。●過日。

さんざん

先手(名) 先に立つ軍勢。●先陣。●先鋒。

さんざん

驚足(名) 遊具の名。二本の竹に横木を附け

之を兩足に踏まへ兩手にて竹の端を持ち動かして歩むもの。

さんざん

崎崎(名) 多くの崎。

さんざん

先先(名) 以前。●前々の時。

さんざん

幸魂(名) さきたまの尊稱。

さんざん

防人(名) 崎守の意。◎中古の制。服役期限

三年にて外患に備ふる太宰府附屬の兵隊。

さんざん

白湯(名) 何も入れぬ湯。●只の湯。

さんざん

浮(自動下二段) 「一」寒く感ずる。「二」さやかに見

ゆる。●さやかに響く。「三」面白みのあらはるい。

さんざん

小百合(名) 百合に同じ。

さゆりば

小百合葉(名) 小百合の葉。(歌詞)

さゝよう

左右(名) 左と右。●みぎひだり。

さゝよう

左右左(名) 禮式又は舞蹈舞曲などにいふ

詞。左足右足と進ませ或は退かする事。

さめ

鯨(名) 魚の名。形丸くして長く。全身鱗の代りに

極めて粗なる皮あるもの。此皮は刀の柄

の飾り又は物を磨く時などに用ひらる。

さめ

(名) 馬の毛色の名。鼻の回りに赤みを帯びたる

もの。○保元「さめなる馬に乗つたるが」

さめ

(副) 涙を流して泣く有様。(又)―さめさめ

さ。

さみだる

(自動下二段) 五月雨の降る。

さみだれ

五月雨(名) 陰曆五月頃に降る霖雨。●梅雨。

●つゆ。

さみだれつき

五月雨月(名) 陰曆五月の異名。

さみし

(形。形狀シク活) さびしに同じ。

さみせん

三味線(名) 俗曲の樂器。四角の胴に棹を附

け三筋の糸を張りいてふ形の撥にて弾くも

の。●三絃。

さみす

(自動サ變) いやしむ。●あなごる。●見下ぐ

る。

さし

紐(名) 穴ある錢を貫く繩。

さし

指。差(名) 「一」差す事。●差す物。「二」物さし。

さし

尺。「三」謡曲の節の名。○「さし」を舞ふ。

さし

「四」舞曲。○謡曲「一さし御舞ひ候へし」

さし

ヒ。匙(名) 金匱又は木竹等にて造りたる小さき杓子。

さじ

座次(名) 着座の順序。●席順。

さし

差入(名) 差入物の略。

さし

差入物(名) 監獄にある人に贈り入る品物。●差入。

さし

差出(自動下二段) 「一」出づる。「二」差叩ふべき場合に口出しする。●出過ぎる。●でしゃばる。

さし

差し(名) 差しかくる羽。……羽の「四」を見よ。

さし

差料(名) 我差す料の刀。

さし

指貫。差貫(名) 直衣、狩衣などの時に用ふる男袴の一種。絹にて身の丈よりは長く造り裾より中に折り返し紐にて足に括り留むるもの。故に着たる時

さし

さしめき

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし

さし



さしおく

は膨れて見ゆ。色は壯年紫、中年以後薄紫、至極の老年は白。地下は花田を定さす。(圖) 差置(他動四段) 打ち捨て置く。●其儘に置く。

さしわたし

差渡(名) 物の或點より或點までの最近の距離。●直徑。

さしかかり

差掛(名) 差當り。●差向。●目下。●現今。

さしかかる

差掛(自動四段) 其場に臨む。●其場所に到る。

さしかたむ

(他動下二段) 固むる。●鎖す。●締りなす。

さしがね

差金(名) まがりかね。●曲尺。

さしかく

差掛(他動下二段) 上より物を覆ふ。

さしかけ

差掛(名) 差し掛けて造りたる屋根。

さしかさ

傘(名) 被り笠に對してからかさといふ。

さしがみ

差紙(名) 官よりの呼び出し狀。●召喚狀。

させ

些少(名) 極めてわづかなる事。●些細。●僅少。●輕少。△(形) 些少の。

させ

座少辨(名) 座席の上。●席上。

させ

左少辨(名) 辨を見よ。

させ

させ

させ

させ

させ

させ

させ

させ

させ

させ

さしぐく

坐食(名) 何もせずに衣食し居る事。●居食ひ。

●くひつぶし。△(動)―座食す。

さしたる

(形) 別にはさいふべき。●格別の。○「さしたる興りなければしも」

さしぞひ

差添(名) 付き添ひ。●補助。

さしぞへ

差添(名) 太刀に添へて短刀を差す事。又は其短刀。

さしづ

指圖。差圖(名) 「一」地圖。●圖面。「二」言ひ付けて事を爲さしむる事。●指揮。

さしづかふ

差支(自動下二段) 障りの生ずる。●故障の起る。

さしづかへ

差支(名) 差支ふる事。●故障。●事故。さしなげに同じ。

さしづな

差次(名) 其次に直續く事。△(形)―差次の。

さしづき

(副)―差次に。銚子(名) 古へ湯、酒など沸かしたる器。銚子

さしなべ

の類。

さしなは

差繩(名) 「一」馬具の名。馬を繫ぎ置く繩。●差綱。(圖) 「二」捕

繩の一名。

さじん

左衽(名) 衣のひだりまへ。



さしむき

差向(名) 差當り。●目下。●目今。(自動四段) 涙を含む。(雅)

さしぐむ

(副) うちつけに。(源氏)

さしぐみに

刺櫛(名) 「一」裝飾の爲めに髪に刺す櫛。(二)催馬樂の曲名。

さしぐしの

刺櫛の(枕) 曉の枕詞。櫛の垢さかいる意。差藥(名) 身體に差し込む水藥。

さしぐすり

差矢(名) 矢の一種。矢筈に鴨の羽を附け鉄を木にて作れるもの三十三間堂の通し矢などに用ひたり。

さしやる

(他動四段) せらるゝ。●し給ふ。(自動四段) しゃるに同じ。

さしまへ

差前(名) 差料に同じ。我差す爲めの刀。刺殺(他動四段) 短刀などにて突き殺す。

さしこらす

差繪(名) 書籍新聞などの文中に挿み入るゝ書。

さして

(副) 「一」目的を定めて。●あてをきめて。「二」是をいうて。●特別に。

さしで

差出(名) 「一」出づる事。「二」差扣ふべき場合に口出す事。●でしゃばる事。

さしあひ

差合(名) さしあふ事。●衝突。

さしあたり

差當(名) 目下。●現今。●差向。

さしあふ_{ヨリ}

差合(自動四段) 物と物と出で合ひて差支の起る。●衝突する。

さしあぐ

差上(他動下二段) 「一」手を頭より高く上ぐる。「二」献上する。●進上する。

さしあぶら

差油(名) 燈に油を差し加ふる事。

さしあし

差足(名) 音せぬやうに歩く足。

さしき

挿木(名) 草木の枝を地に挿し込みて根を生ぜさする事。

さしぎ

鎖子木(名) 戸を鎖す爲めの木。

さしき

棧敷(名) 祭、競馬、能、芝居、相撲の類見物の爲めに高く設けたる場席。

さしき

座敷(名) 「一」家にて客を通す室。「二」居處。●位置。○長門本平家「扇は風に吹かれて座敷にたまたまずくるりくさぞめくりける」

「三」烏帽子の頭にすはりたる体。●烏帽子の着工合。○長門本平家「狩衣着し烏帽子の座敷を正しくして」

さしあぐ_{ナヨ}う

差几帳(名) 几帳の一種。帳臺に似て小さく上に薄物を覆ひて自ら持ちて歩くもの。其形は舟の帆に似たり。

さしめ

座主(名) さすに同じ。

さしみ

刺身(名) 食品の名。魚類の肉を薄く切りて醬油などを掛け生にて用ふるもの。

さしひか_エ

差扣(名) 徳川時代官吏の過意ありし時差扣へて家に籠り罪を待つ事。●謹慎。……今の進退伺の類。

さしひく

差引(他動四段) 或數より或數を引き去る。差引(名) 「一」或數より或數を引き去る事。

さしひき

「二」商家の詞。引き去るべきものは引き去りて總勘定をする事。「三」潮の満ち引き。

さしも

「四」病にて熱の昇降。それはごにも。●あれはごに。●そんなに。○謡曲「さしも名高き富士はなご」

さしもつれ

差縫(名) 縫れたる事。●ごたご。●紛紜。

さしもの

指物(名) 「一」武具の名。鎧の背に指す小旗。●姓名旗。「二」大工のする小細工物の總名。

さしもの

……箱、火鉢、机などの類。(形) それほどの。●あれほどの。○「さしもの辨慶」

さしものし

指物師(名) 指物を作る大工。

さしもぐさ

(名) 草の名。艾に同じ。蓬。

さしすぎ

差過(名) 差出。●出過。

さしすぎびと

差過人(名) 出過者。●差出者。(雅)

さび

錆(名)

「一」金屬の面の酸化してあらはるゝもの。「二」特には鉄に付く赤色のもの。

さび

(名)

烏帽子に寄せたる皺。……大さび横さび柳さびを見よ。

さび

(名)

「一」年久しくなりて物事に趣の付く事。「二」澁み。

さびいろ

錆色(名) 鉄の錆の如き色。黒みたる赤色。

さびろ

座廣(名)

だいつびろき事。(長明無名抄)

さびろ

左兵衛(名)

兵衛を見よ。

さびろ

左兵衛府(名)

右兵衛府と並び立ちて禁中を護衛する官廳。官吏は雪、佐、尉、志、府生あり。

さびつきげ

錆月毛(名)

馬の毛色の名。白毛の上に茶色の斑點あるもの。

さびえ

(名)

水の赤くなりたる江。

さびあゆ

(名)

錆色の鮎。秋になりて老いたるもの。

さびし

淋寂(形。形状言シク活)

人少なにて靜なる有様。●さむし。●さぶし。

さも

(副)

「一」左様にも。●其通りに。「二」いかにも。尤に。●いかににも。●げにも。

さもらいふ

侍(自動四段)

さむらふに同じ。

さもあらばあれ

(副)

どうでもよいは。●よいは○和泉式部日記「うちすてゝ旅行く人はさもあらばあれ又なきものに君し思はれ」

さむし

(形。形状言シク活)

卑し。●卑劣な。

させつ

挫折(名)

挫け折るゝ事。△(動)挫折す。

させん

左遷(名)

罪により官位を貶さるゝ事。●高官者の流罪。

ざぜん

坐禪(名)

禪宗の修行法。默坐して禪理を悟る事。

ざぜんまめ

坐禪豆(名)

食品の名。甘く煮たる黒大豆。

ざせも

(名)

ざせもぐさの畧。

ざせもぐさ

(名)

さしもぐさに同じ。

ざす

(助動下二段)

しむに同じ。○「見さす」「得さす」差。指。刺(他動四段)

ざす

「一」指にて示す。●當てを定むる。●目的の方に向ふ。「二」手を伸ばす。「三」突き込む。「四」狭み込む。「五」傘を立てて騎す。「六」笠、疊、蓑、庵などを造

る。「七」紐を結ぶ。「八」簾^わを掛くる。「九」印

を押す。「十」几帳を立つる。「十一」葉、枝、榎

などの生ひ出づる。「十二」日、月、星、燈などの

光の出づる。「十三」脂燭を點火する。「十四」献盃する。「十五」鎖す。●締りをする。

「十六」花を活ける。「十七」針にて縫ひかける。「十八」注ぎ入る。●つきこむ。「十九」

他の動詞の前に置きて意味音調を強むる
詞。○「さしおく」「さしおごる」「さす」

座主(名) 天臺宗の管長。●延暦寺の住職。
座(自動四段) 「一」すわる。「二」まきでへされる。

●運座する。
(自動四段) 手先にて撫づる。●快き程になづる。

(名) 腰に差す小さき刀。
(副) 「一」さばいへど。●しかながら。「又」一

さすがに。○古今「天雲のふそにも人のな

りゆくか。さすがに目には見ゆるものから」
「二」いかにも其物相應に。●あつぱれ○「さ

すが弓取の名人なれば(又)一さすがに。△
(形)一さすがの。
差金(名) さしがねに同じ。

さすなべ 銚子(名) さしなべに同じ。

さすらふ 浪する。●漂泊する。●流

さすのみこ (名) 神慮を伺ひて豫言を爲す巫^{みこ}。

さすまた 刺股(名) 鉄製の二脛に長き柄を附け番所な

ごの非常

防禦に備

へ置きた

る具。突棒もちりの類。(圖)

さすえ (名) 古代の器。盃の類。

さすき 假床(名) 假に造り設けたる床。